

【1】 通商・遊行ルートを想定するための基準地点とその位置確定

はじめに

本稿は「研究の目的と方法」にも記したように、原始仏教聖典が記す誰それがどこからどこを經由してどこまで通商あるいは遊行したという記事を細大漏らさず収集し、それをもとに原始仏教時代の陸上交通ルートを地図上に描いてみようとするものである。

しかしながら原始仏教聖典が記す場所がインド地図上のどの地点にあったかということが明らかになっていなければ地図上にそのルートは描けない。そこで本稿では細大漏らさず収集した通商・遊行記事のなかでその場所が明らかにできる地点を「基準地点」と定めて、この基準地点を元に地図を作ってみることにした。

[1-1] われわれが「基準地点」とした指標には以下の4点がある。すなわち

- ①古代の都市が現代まで継承されていたり、遺跡などが発見されたりして、その地図上の位置が確定している地点
- ②遺跡は発見されていないが、状況的に紛れがないと考えられる地点
- ③この総合研究においてすでにその位置が想定されている地点
- ④本論文においてその位置が想定された地点

である。

といっても④については一言しておかなければならない。③についてはそこそこにきちんとした作業を行い、論文としてまとめてあるが、④は本稿が陸上交通路のルートを地図の上に描いてみるという要請に応じて、ほとんどがその大体の位置を想定しようとしたいわば仮説のようなものにすぎない。いわばルートを想定するうえで大過がないという程度の精度しかもたないものが多いということである。

このように「基準地点」は、その場所が地図上に確定ないしは想定できるということであって、必ずしもその場所が大都市であるとか、大きな遺跡が発見されている場所をさすものではない。原始仏教聖典の記述を材料にする以上、確かに釈尊がしばしば訪れられた場所が中心となり、それは確かに大都市であるとか、大きな遺跡が発見されている場所と重なる場合が多いが、一般にはほとんど知られていない場所も含まれていることをご承知おき願いたい。

また別の視点からいえば、この「基準地点」には次のような4種類の地名が含まれている。

- (1) われわれが今までに報告した【資料集2】「原始仏教聖典の仏在処・説処一覧」において仏在処・仏説処として地名が挙げられている場所。資料集には以下の5点がある。

【資料集2-1】 「マガダ国篇」 (『モノグラフ』第2号 2000年7月)

【2-2-1】 「祇園精舎(経蔵)篇」 (『モノグラフ』第4号 2001年11月)

【2-2-2】 「祇園精舎(律蔵)篇」 (『モノグラフ』第5号 2002年5月)

【2-3】 「コーサラ国篇」 (『モノグラフ』第8号 2004年3月)

【2-4】「その他国篇」（『モノグラフ』第15号 2009年10月）

(2) 仏在処・仏説処にはなっていないが、釈尊が遊行の途中に通過した場所

(3) 仏在処・仏説処にはなっていないが、仏弟子が活動し遊行した場所

(4) 仏在処・仏説処でもなく、また仏弟子が遊行し活動したところでもないが、本論文において幹線道路が通過していたであろうと想定した場所

なおこの場合、(1)(2)(3)には必ず【2】「原始仏教聖典に記された通商・遊行ルートの基礎データ」に紹介するデータが存するが、(4)についてはこのデータが存しないところもある。具体的にいえば、われわれは中国・辺国の境になる場所は、幹線道路上にある1地点と考えて基準地点に加えたが、ここを訪れたり通過したりするデータがないものがあるからである。

[1-2] 以下にはそれぞれの基準地点について、(1) 釈尊や原始仏教聖典に記される主な事績の簡単な解説、(2) それが現在の地名でいえばどこに比定されるか、(3) その場所に比定する根拠、(4) その場所は緯度・経度では何度何分になるか、(5) この方面では必ずしも専門家とはいえないわれわれが知りうる範囲での残された遺跡の状況、(6) そのほか『法顕伝』『西域記』の参考にすべき記事などについて記す。われわれがもっているその場所の写真も掲載したが、誰でも納得しうるような基準地、例えば *Bārāṇasī*、*Kusinārā*、*Vesāli* などの場合は出さず、一般に常識として認められてない地点の確定のため、「百分は一見に如かず」という意味で掲載した。

なお緯度・経度を細かく示したとしても、本稿に掲載する「地図帳」レベルの地図上に反映しえないことはいうまでもない。むしろ地図上に示した位置は大ざっぱなものというべきで、本来は *Gayā* と *Uruvelā* も重なって区別することができないが、地図上は無理に離して記載したという程度のものである。したがって一々緯度・経度を示したのは、われわれの作業段階ではガンジス河沿岸地帯が昼1 昼分もあるような大きな地図を用いたからであり、また確認されたい向きには確認していただきたいという意味からである。

ちなみに緯度1分の距離は1.8519kmに相当し、北緯25度のところの経度1分は1.6627kmに相当する。例えば初転法輪の地サールナート (*Sārnāth*) は北緯25° 22′、東経83° 01′であり、パーラーナシー (*Bārāṇasī*) の *Shri Kashi Vishwanath Temple* (俗にいうところの *Golden temple*) のところは北緯25° 18′、東経83° 00′であり、緯度だけをとらえてみればパーラーナシーと鹿野苑は4分違っているから7.4km離れていることになる。

[1-3] なお基準地点の紹介順序は、パーリ語表記のローマ字のアルファベット (abc) 順とする。

パーリ語ならパーリ語の母音・子音の配列 (a, ā, i, ī) 順序のほうがよさそうであるし、項目はパーリ語のカタカナ表記でたてたのであるから50音 (アイウエオ) 順にしたほうがよさそうであるのに、ガヤーよりもパーラーナシーの方が前に来るような不自然さを犯してまでなぜわざわざローマ字のアルファベット順にしたかといえば、はなはだ手前勝手な理由で申し訳ないのであるが、われわれがパソコン上に構築している「釈尊伝データ」が赤沼智善編の『印度仏教固有名詞辞典』⁽¹⁾ の項目に番号をふってこれを利用していただいております、これがアルファベット順に配列されているからである。これによれば *Abala* が0001番であ

り、Yuvañjaya が 5389 番となる。

なぜこのようなことをしたのかといえば、漢訳の原始仏教聖典に用いられている人名・地名などの固有名詞はそれこそ多種多様に翻訳されて、そのまま用いると混乱を避けえないからであって、そこで人名・地名のそれぞれに番号をふって漢訳名が異なっても identify できるようにしたからである。だからパソコン上の「釈尊伝データ」を地名順にソートすると、このような順序で出てきてしまうのである。

なお本稿は「研究の目的と方法」の凡例にも記したように、基準地名をパーリ語（大文字は SuzEurU あるいは SuzBudCU 体、小文字は SuzBudRU 体）で表記するのを原則とするが、本節の項目にはパーリ語の音をカタカナにうつしたものを項目名として掲げた。【2】原始仏教聖典に記された通商・遊行ルートの基礎データ、【3】基礎データをもとに加工した「直近 2 基準地点間」資料でも同じ原則をとっているのでご注意ください。

また基準地名にはサンスクリット（Skt.）と漢訳語を挙げておいたが、それは【2】の「原始仏教聖典に記された通商・遊行ルートの基礎データ」に出るもののみで、データにサンスクリットや漢訳語がない場合には空欄とした。なお漢訳語については音写語を先とし、意識語を後とした。

- (1) この辞典は偉大な成果であり、われわれの研究はこの成果に全面的によらせていただいております、これを越えることができたのはごくわずかであると自覚している。

[1] アーラヴィー (Āḷavi)

Skt. :

漢訳語：阿荼脾邑、阿荼髀邑、阿臘脾邑、曠野城、曠野国、広野聚落、曠野処

[1-1] Āḷavi は『モノグラフ』第 15 号【資料集 2-4】「原始仏教の仏在処・説処一覧—その他国篇—」（以下『その他国篇』という）の【補註 7】「Āḷavi (アーラヴィー国)」(執筆者：岩井昌悟)に記したように、釈尊がアーラヴァカ夜叉を退治したところとして知られ、パーリの註釈書などに記される「雨安居地伝承」では、釈尊が成道後第 16 年に雨安居を過ごされた地とされる⁽¹⁾。漢訳が「曠野」「広野」とするのはパーリ語の Āḷavi、サンスクリット語の Atavi が「森」の意味を有するからである⁽²⁾。

- (1) 「モノグラフ」第 6 号に掲載した【論文 5】「原始仏教聖典資料に記された釈尊の雨安居地と後世の雨安居地伝承」p.071 を参照されたい。

- (2) 『その他国篇』【補註 7】p.629 左

[1-2] Āḷavi という地名が国名なのか、それとも都市名なのかははっきりしないが、『その他国篇』では国として処理し、これを Varanasi からおよそ東に 130km、Patna から西におよそ 100km の Ganga 河左岸（北岸）にある Uttar Pradesh 州 Ballia district の都市 Ballia あたりに比定している⁽¹⁾。ただしこれは地図帳レベルのおおまかな地点として想定したものである。その緯度・経度を Ballia Railway Station の位置で示すとすれば、北緯 25° 45′、東経 84° 09′ となる。

- (1) 詳細は【補註 7】pp.632~3 を参照されたい。

[2] アーパナ (Āpaṇa)

Skt. :

漢訳：阿摩那城、阿摩那国、阿耆那、阿和那

[2-1] Āpaṇa はマガダ (Magadha) 国の属国であった Ganga 河下流域南岸にあるアング (Aṅga) 国とは反対に、Ganga 河北岸にあったアングッタラーパ (Aṅguttarāpa) 国の町で、そこに住むケーニヤ (Keṇiya) という螺髻梵志が釈尊と弟子たちを食事に招待し、セーラ (Sela) 婆羅門をしてビンビスーラ (Bimbisāra) 王とその軍隊を一緒に招待しているのかと驚かせたというエピソードで知られる町である。

アングッタラーパ国はパーリの註釈書では、ヒマラヤに水源をもつ現在の Koshi 河に比定できるであろう Mahāmahi 河の北にあった水郷であるといい、Āpaṇa には 2 万の商店 (āpaṇa) が軒を連ねていたという。

[2-2] 以上は『その他国篇』の【補註 6】「Aṅguttarāpa (アングッタラーパ国)」(執筆：森章司) の解説⁽¹⁾を要約したのであるが、ここではルートを想定するという目的のもとでのだいたいの見当として、アング国の首都 Campā の北方で、Mahāmahi 河 (現在の Koshi 河) 沿いの河岸地域にあり、しかも市町村規模の地区といった諸条件を加味して Bihar 州 Madhepura district の Phulaut に比定しておきたい⁽²⁾。その地の緯度・経度を Phulaut Chowk Bus Stop の地点で示せば、北緯 25° 30′、東経 86° 56′ になる。

(1) p.626 左以下

(2) 活字にはなっていないがわれわれのホームページでは公開している、「インド調査旅行記録 (2011 年 2/18~3/14)」の 3 月 9 日の記録 (バーガルプル Bhagalpur にて) に、森章司は「市内のホテルで昼食。食後ガンジス河を見に行く。Mahiresi アシュラムと書かれた建物の脇を抜けたところがクーバガートで、ここで 1 人の老人が沐浴を終えたところで衣服を乾かしていた。この人に向こう岸はどこかと聞くとウッターラーアングで、その先にはどのような町があるのかと聞くとミティラー (Mithilā) と答えた」と記している。この「ウッターラーアング」がここにいうアングッタラーパに相当するであろう。

[3] バーラーナシー (Bārāṇasī)

Skt. : Vārāṇasī

漢訳：婆羅痾斯城、波羅痾斯城、波羅奈城、婆羅捺城、波羅城、婆羅痾斯国、波羅捺国、波羅捺国、波羅脂国、波羅奈国、波羅国、波羅奈、波羅捺、波羅捺、婆羅痾斯、波羅痾斯

[3-1] Bārāṇasī はもちろんインド古代からの宗教都市として知られる Ganga 河中流域の北岸にある Uttar Pradesh 州の Varanasi district の都市 Varanasi、日本語でいうところのベナレスにあたる。原始仏教時代には十六大国の一つとして数え上げられる Kāsi 国 (迦尸国、荻苗国、迦尸) の首都で、パーリ文の『大般涅槃経』や『梵文涅槃経』では六大都市の一つとして数えられている。『西域記』によれば、その頃の Bārāṇasī は周囲 4 千余里で

西に Ganga 河を臨み、大都城の長さは 18、9 里、広さ 5、6 里⁽¹⁾で、伽藍が 30 余カ所あってそこには僧徒 3 千人が住んでおり、みな小乗の正量部を学んでいたとしている⁽²⁾。

寡聞にして現在の市内に仏教の遺跡があるかどうかを知らないが、市の東北の Lat Bhairon にかつてはアショーカ石柱法勅の断片があったが、1908 年の暴動で破壊されたとされている⁽³⁾。

Bārāṇasī を Shri Kashi Vishwanath Temple (俗にいうところの Golden temple) に代表させてその緯度・経度を示せば北緯 25° 18′、東経 83° 00′ となる。

(1) 玄奘時代の 1 里は 400~440m とされる。『西域記』1 p.265

(2) 『西域記』2 pp.327~8

(3) 同上書 p.330 の註 2

[3-2] ここから北東へ直線で 7km ほどの距離にある Sārnāth⁽¹⁾ は、仏教の四大聖地 (DN.016 Mahāparinibbāna-s.に巡礼地として、釈尊の生誕地ルンビニー、成道の地ブッダガヤー、初転法輪の地サールナート、入滅の地クシナーラーをあげる)⁽²⁾ の一つに数えられる仏の初転法輪の地で、パーリ語では Isipatana Migadāya といい、漢訳では仙人住处鹿野苑、仙人住处鹿野園、仙人堕处施鹿林、鹿野苑中仙人住处、仙人鹿野苑、古仙人住处鹿野苑、仙人鹿苑、鹿野苑、鹿野園などとされる場所である。

『法顕伝』と『西域記』はともに、ここに訪れたときには比丘が住んでいたとしている⁽³⁾。現在の Sarnath (Deer Park) は遺跡のみであり、アショーカ王の小石柱法勅 (破僧伽に関する法勅) も残されている⁽⁴⁾。またその遺物を収めた立派な博物館 (Archaeological Museum Sarnath) が建てられている。

(1) 中村氏によれば「サールナートという名は、この地が Śāraṅganātha という菩薩の名と結びつけて考えられたので、それが縮約して Sārnāth となったのである」と述べている。

中村元『ゴータマ・ブッダ I』(中村元選集 [決定版] 第 11 巻、春秋社、1992) p.527

(2) vol. II p.140

(3) 『法顕伝』p.123、『西域記』2 p.330

(4) 中村元『インド史 II』(中村元選集 [決定版] 第 6 巻、春秋社、1997) p.393

[4] バッディヤ (Bhaddiya)

Skt. :

漢訳：跋提城、跋提羅城、婆提城

[4-1] Bhaddiya は、穀倉が自然に満ちるといふ不思議な威徳を持っていたとされるメンダカ長者 (Meṇḍaka seṭṭhi) が住んでいたところで、その孫の、後に舍衛城の東門に東園鹿子母講堂 (Pubbārāma Migāramātupāsāda) を建てたとされているヴィサーカー・ミガラーマター (Visākhā Migāramātā) の出身地とされる都市 (nagara) である⁽¹⁾。

(1) 2 人の事績などについては『モノグラフ』第 12 号に掲載した岩井・本澤・カタブンニョー編【資料集 7】「Visākhā Migāramātā 関係資料」を参照されたい。

[4-2] この地の位置関係についてはすでに『その他国篇』の【補註 6】「Āṅguttarāpa (アングッターパ国)」において、先の Āpaṇa と関連させて「ガンジス河の北側にあり、ヴェーサーリーとアングッターパの間であって、アング国に属していたと考えるのが

妥当であろう」⁽¹⁾と推定してある。

しかし具体的な地図上の地点を定めるまでには至っていなかったもので、今回ルートを想定するにあたって、Ganga 河の北側にあつて **Vesāli** とアングッタラーパ国の **Āpaṇa** との中間に位置する地点ということで、確かな根拠があるわけではないが音も近いので、現在の Bihar 州 Saharsa district にある Bhaddi という村に比定することにした。この村は北緯 25° 46′、東経 86° 49′ に位置する。

(1) p.627 右

[5] パールカッチャ (Bhārukaccha)

Skt. :

漢訳 :

[5-1] Bhārukaccha を仏在処・説処とする原始仏教聖典はなく、仏弟子の記事が存するのみである⁽¹⁾。

(1) 『その他国篇』 p.582

[5-2] Bhārukaccha についてはすでに『その他国篇』の【補註12】「Bhārukaccha (パールカッチャ)」(執筆者:金子芳夫)において論考しており⁽¹⁾、仏典からはここが国際的な港町であったことが知られる。

『西域記』の訳註者水谷真成氏は巻十一の「跋祿羯咄婆国」がこの Bhārukaccha に相当するとし、現在のインド半島の付け根部分のアラピヤ海に面した Gujarat 州 Bharuch district の都市 Bharuch に比定している⁽²⁾。われわれもこれを採用することにする。この地を駅名 Bharuch Railway Station の緯度・経度で示せば、北緯 21° 42′、東経 72° 59′ となる。

(1) p.650 左

(2) 『西域記』3 p.307 の註1

[5-3] 『西域記』はそこには僧伽藍が 10 余箇所あり、僧徒が 300 余人いて、大乘と小乗の上座部を学んでいたとしている⁽¹⁾。

また Bhārukaccha は、紀元後 1 世紀頃のギリシア文献である『エリュトゥラー海案内記』第 48 節の中に「バリユガザ (Barygaza)」の名で登場し、オゼーネーからバリユガザに物資が運ばれてくるとか⁽²⁾、同第 51 節には「ダキナバデースにある商業地のうち最も著名なものが二つあり、バリユガザから二十日の道のりだけ南に距ったパイタナ(執筆者註: Pæthana、Patiṭṭhāna のこと)と、これから約十日の距離東にある別の非常に大きな市のタガラ(執筆者註: Tagara)とである」⁽³⁾とされている。

オゼーネー (Ozene) とは後述の基準地点 [37] 「ウッジェーニー (Ujjeni)」にあたり、パイタナ (Pæthana) というのは基準地点 [24] 「パティッターナ (Patiṭṭhāna)」に相当する。またダキナバデース (Dachinabades) とはダッキナーパタ (Dakkhiṇāpatha) すなわち「南道」にあたる。南道については後節【6】「原始仏教聖典に記されたルート①—南道と北道—」において詳しくふれる。

すなわち紀元後 1 世紀頃には Bhārukaccha は内陸への物資の輸送基地であり、西方諸国と

の交易港として知られていたということがわかる⁽⁴⁾。おそらく原始仏教時代にも港町として栄えていたのであろう。

- (1) 『西域記』3 p.307
- (2) 村川堅太郎訳註『エリュトラー海案内記』（中公文庫、1993）p.132
- (3) 同上書 p.134、Wilfred H. Schoff, *The Periplus of the Erythraean Sea :Travel and Trade in the Indian Ocean by a merchant of the first century*, Longmans, Green. And Co., Fourth Avenus & 30Th Street, New York, London, Bombay and Calcutta, 1912（インターネット上で使用させて頂いた：University of Toronto-Robarts Library、以下 Schoff と略す）p.043
- (4) 長澤和俊著『海のシルクロード史』（中公新書 915、1989）p.030、定方晟「バルカッチャの船乗り—仏典とエリュトラ海案内記の接点—」『印度学仏教学研究』（第 25 巻第 1 号、1976）p.089

[6] ボーガ城 (Bhoganagara)

Skt. : Bhoganagaraka

漢訳 : 善伽城、負弥城、夫延城、夫延邑、受用城

[6-1] 「ボーガ城」としたのは、つねに Bhoganagara と表わされるからである。ボーガ城は『涅槃経』に描かれる釈尊最後の遊行では「四大教示（仏説であるかどうかを決める四つの基準）」を説かれた地である。

[6-2] Patna にある K. P. Jayaswal 研究所 (The K. P. Jayaswal Research Institute) の Jagdishwar Pandey 氏はこの Bhoganagara を現在の Bihar 州 Gopalganj district の Bhore に比定している⁽¹⁾。Bhore は古代の Vesāli からは Gandak 河を渡ってから西にかなりの距離を行ったところにある。すなわち Gandak 河の西岸（右岸）にあるわけである。

しかし Malalasekera と『赤沼』は Bhoganagara はヴァッジ (Vajji) 国の都市 (nagara) としている⁽²⁾。ヴァッジ国は Gandak 河の東岸（左岸）一帯にあったと考えられており、現在の Bhore はわれわれの感覚ではむしろマッラ国の領域にあったように思われる。

われわれは最後の旅において釈尊は Vesāli を出たところですぐに Gandak 河を渡られ、西北に進まれたと考えている⁽³⁾から、Pandey 氏が Bhoga-nagara を Bhore に比定するのは共感できる。ということで、ここでは同氏の比定を採用する。

Bhore Bus Stop をもってこの地を示せば、北緯 26° 27′、東経 84° 06′ となる。

- (1) *Footprints* pp.032~3、p.048
- (2) *Malalasekera II* p.393、『赤沼』p.097
- (3) 『モノグラフ』19号【研究ノート9】「『涅槃経』の遊行ルート」

[7] チャンパー (Campā)

Skt. : Campā

漢訳 : 占波城、瞻波城、瞻婆城、占波国、瞻波国、瞻婆国、瞻萄国

[7-1] Campā は、過度の経行によって足から出血し、釈尊に琴の絃の喩えをもって中道を諭されたとされるソーナ・コーリヴィサ (Soṇa-Koḷivisa) の出身地として知られ、また『律蔵』の1章を構成する「瞻波鞞度」(Campeyyakkhandhaka) の舞台となったところでもある。

Campā は十六大国の一つに数えられるアंगा (Aṅga) 国の首都であったが、釈尊時代にはそのアंगा国そのものもマガダ国の属国であった⁽¹⁾。

先に述べた Āpaṇa や Bhaddiya は Ganga 河下流域の北岸にあったが、ここは南の沿岸にある。

(1) 『モノグラフ』19号【研究ノート1】「釈尊のアंगा (Aṅga) 国訪問年の推定」

[7-2] Campā の故地は、Ganga 河沿岸にある現在の大都市 Bhagalpur の西約 8 km のところにある現在の Champanagar という村に比定してよいであろう。

ここには現在 Campa と呼ばれる川が南の方から Ganga 河に流れ込んでおり、パトナ博物館の O. P. Pandey 氏によると、1970 年にここをパトナ大学が発掘調査して、10 個くらいの古代の建物跡が発見されたということである（その報告書は出されているのであるが、残念ながら出版されていないという）。

Champanagar は北緯 25° 14′、東経 86° 55′ に位置する。



Campā 川辺の Hindu 寺院



看板右下に Campā の文字

[7-3] 『法顕伝』はこの地には仏の精舎、経行処、四仏坐処があり、すべてに塔が建っていて、僧侶が住んでいると伝えている⁽¹⁾。

また『西域記』は、この国は周囲 4 千余里あり、北はガンジス河を背にし、国の大都城は周囲 40 余里あるといい、伽藍は数十カ所あるが損壊しているものが多く、僧徒は 2 百余人、小乗の教えを学んでいると伝えている⁽²⁾。

(1) 『法顕伝』p.132

(2) 『西域記』3 p.202

[8] ダッキナーギリ (Dakkhiṇāgiri)

Skt. :

漢訳：南山国土、南山聚落、南山村、南山、南方

[8-1] Dakkhiṇāgiri は、釈尊入滅後にラージャガハ (Rājagaha) で行われた第一結集のとき、プラーナ (Purāṇa) 長老のグループがここに滞在していて出席しなかったところである⁽¹⁾。また舍利弗と目連を上首とする比丘サンガがアヴァンティ (Avanti) 国のヴェールカントカ (Veḷukaṅṭaka) へ遊行したときに、この地を経由していたと考えられるので⁽²⁾、ここはデカン高原に行くときの入口ルートとなっていたとも考えられる。

(1) 『パーリ律』「五百鞞度」(vol. II p.287)。これに相応する律の『五分律』「五百集法」

(大正 22 p.191 下) にも「時長老富蘭那在南方」とある。

- (2) AN.007-005-050 (vol.IV p.063) に「あるとき舍利弗と目連が大比丘サンガと共にダッキナーギリを遊行していた (*Dakkhiṇāgirismim cārikaṃ caranti*) …ときに舍利弗と目連を上首とする比丘サンガが本来の朝食 [を摂るために]、ヴェールカンタカに入った (*yena Veḷukaṇṭako tad avasari*) 」とある。註釈書 AN.A. (vol.III p.365) によれば「『[ナンダ母 *Nandamātā* の] ヴェールカンタキー』とはヴェールカンタカ城の住人である (*Veḷukaṇṭakī ti Veḷukaṇṭaka-nagara-vāsini.*) 」とか、*Suttanipāta-A.* (vol. I p.370) では *Veḷukaṇṭaka-nagare* とか、あるいは *Theragāthā-A.* (vol. I p.370) では「アヴァンティ国のヴェールカンタカ城 (*Avantiraṭṭhe Veḷukaṇṭaka-nagare*) 」 (vol. I p.105) とある。

[8-2] 本稿では *Dakkhiṇāgiri* を地点のように扱っているが、そもそもこれはある広さを有する地域かもしれない⁽¹⁾。

確たる理由はなく、ただ *Rājagaha* よりも南で、デカン高原部に入る入り口あたりということで、*Dakkhiṇāgiri* を現在の Bihar 州 Nawada district の Ramdasi と想定しておく。

この Ramdasi は Rajgir の南東、直線で 19km ほどにある都市 Nawada から国道 31 号線を約 29km 南下すると Rajauli という町に至るが、その手前で Dhanarjay 川を渡り左岸 (西岸) に出、さらに Ranchi 方面へ向かう国道 33 号線に入り直線で約 3km ほど南下したところで、ちょうどデカン高原部に突き当たる手前となる。この地区の緯度・経度を示せば、北緯 24° 37′、東経 85° 30′ となる。

- (1) *Samantapāsādikā* (vol. I p.070) などに *Dakkhiṇāgiri-janapada* とあるので、ある広さを有する地域と見なせよう。 *Malalasekera I* p.1049

[8-3] 『法顕伝』では、法顕自身は行っていないのであるが、伝聞でコーサンビー (*Kosambī*) から南 200 由旬に「達嚩」という国があるとしている。訳註者の長澤氏は、「*Dakṣiṇa* (*Pāli* : *Dakkhiṇa*) 現位置未詳。コーシャーンビー国の南 200 由延とあるから、南インドのデカン高原中の 1 国であろう」としている⁽¹⁾。『法顕伝』は、ここには大石山をくりぬいて作った過去仏の迦葉仏を祀った僧伽藍があり、「この土地は荒れ果てて人民は住んでいない」としている⁽²⁾。ひよっとするとこの *Dakkhiṇāgiri* にあたるのかもしれない。Ramdasi は大きな石がごろごろしている地形のところである。

- (1) 『法顕伝』p.127 の註 1

- (2) 同上書 pp.126~7

[9] デーヴァダハ (*Devadaha*)

Skt. :

漢訳 : 天示城、天指城、天現聚落、天邑、天示

[9-1] *Devadaha* はコーリヤ (*Koliya*) 国の首都に相当する都市で、ここに住む人びとはコーリヤ族と呼ばれるが、広い意味では *Kapilavatthu* の住民たちと同じ釈迦族に属していた⁽¹⁾。仏母マハーマーヤー (*Mahāmāyā*) 夫人の生まれ育ったところである。【論文 11】「提婆達多 (*Devadatta*) の研究」⁽²⁾ に書いたように、釈尊の家系ゴータマ家とマハーマーヤーの家系とは交差いここ婚をしていたとされる。

【1】 通商・遊行ルートを想定するための基準地点とその位置確定

- (1) 『その他国篇』【補註2】「Koliya (コーリヤ国)」(執筆: 本澤綱夫) p.618 右
(2) 『モノグラフ』第11号 p.007

[9-2] 現在のネパール連邦民主共和国 (Federal Democratic Republic of Nepal) の西



Devadaha 村入口アーチ

部地区 Rupandehi district の Bhawanipur (or Bhavanipur) 市にはその故地とされる村があり、その入り口にはここが Devadaha 村入口であるというアーチが懸けられ、村内には Mahadevi (Mahāmāyā の尊称) を名に掲げる高等学校や孤児院などがある。ただし古代遺跡のようなものは何も残されていない。



Mahamaya Bhawani 高等学校



Mahadevi 生家

Devadaha 村の入口の緯度・経度を示せば北緯 27° 36′、東経 83° 33′ である。

またこの近くにはマーヤーの生家とされる場所(北緯 27° 35′、東経 83° 34′)もあるが、これも確からしい証拠はない。

[10] ガヤー (Gayā)

Skt. :

漢訳: 伽耶城、伽耶

[10-1] Gayā は釈尊時代からの大きな町であったが、Gayā の町自体を仏在処・説処とするデータはない。むしろ現代では仏成道の地が Bodh Gaya という名でよばれるようになっているのでこれによって名が知られている。しかし仏典では仏成道の地は Uruvelā と呼ばれ、本稿でもこれを採用して、基準地点 [38] で取り上げる。

[10-2] 古代の Gayā が現代の Bihar 州 Gaya district にある Gaya にそのまま継承されていることは紛れもないが、仏典には Gayāsīsa という地名⁽¹⁾のほうがよく出てくる。ここ



Gayāsīsa (Brahmayoni Hill) 遠景

は Gaya の町から西南のほど近いところにある Brahmayoni 山と呼ばれる小高い山に比定されている。山頂に Brahmayoni Temple があり、この寺院の緯度・経度で示せば、北緯 24° 46′、東経 84° 59′ となる。

釈尊は初転法輪の後再び Uruvelā に帰られ、ウルヴェーラカッサパ (Uruvelakassapa)、ナディーカッサパ (Nadikassapa)、ガヤーカッサパ (Gayākasapa) の迦葉 3 兄弟との仲間たちを教化して、いっぺんに弟子たちが 1,000 人という大集団にふくれあがったので、Uruvelā という小村では生

活が成り立たなくなっていて、ガヤーという大都市のそばの Gayāsīsa に移られ、ここで6年間を過ごされた⁽²⁾。

本稿では Gayāsīsa を Gayā と読み替えてデータを採取した。Gayāsīsa の漢訳語には伽耶山、伽耶山頂、伽耶頂制底、象頭山、象頂山がある。



Brahmayoni 山の山頂のヒンドゥー教寺院

- (1) SN.A. (vol. II p359) には「‘ガヤーシーサに’とは、ガヤー村の近くにガヤーという一つの蓮池も、河もあった (Gayāsīse ti Gayāgāmassa

hi avidūre Gayāti ekā pok- kharanī pi atthi nadi pi)。ガヤーシーサと名づける象の面瘤に似た頂の岩もあって (Gayāsīsanāmakko hatthi-kum- bha-sadiso piṭṭhi-pāsāṇo pi)、1,000 人の比丘たちの居場所があるようなところに世尊が住された (yattha bhikkhusahassassa pi okāso pahoti, bhagavā tattha viharati)。それ故に‘ガヤーシーサに’と言われる (tena vuttaṃ "Gayāsīse" ti)」とある。

- (2) 『モノグラフ』第18号【論文25】「サンガと律蔵諸規定の形成過程」p.113

[10-3] 『西域記』は、伽耶山の山頂には高さ 100 余尺の石の峯塔波があり、無憂王が建てたものとしている⁽¹⁾。しかし現代の Brahmayoni 山の山頂にはヒンドゥー教のお寺はあるが、アショーカ王に関連するような遺跡はみつかっていない。

- (1) 『西域記』3 p.068

[11] ゴーダーヴァリー河 (Godhāvarī nadī)

Skt. :

漢訳 :

[11-1] Godhāvarī 河は、現代でも Godavari 河と呼ばれるデカン高原の西ガーツ (Western Ghats) 山脈に源を発し、北西から南東方向に横切って Andhra Pradesh 州においてベンガル湾へと流れ込む全長 1,465km に及ぶ大河である。したがってこれを1つの地点で示すことはできないのであるが、ルートを示すために仮に Maharashtra 州 Nanded district の都市 Nanded に比定してみた⁽¹⁾。この地点を Nanded Railway Station の位置で示すと、北緯 19° 09′、東経 77° 18′ になる。

- (1) 基準地点 [24] パティッターナ (Patiṭṭhāna)、すなわち現在の Paithan から東方へ、Godavari 河の下流に位置する Nanded 辺りの川沿いまで、直線距離で約 204.99km ある。

[11-2] わざわざこのような無理を犯したのは、原始仏教聖典の中では屈指の遊行ルートデータといってよい *Suttanipāta* 005-001 (v.976-977)⁽¹⁾ の記事があるからである。これは次節【2】に紹介する基礎データの [9-①]-01 にあたるが、ここにはバーヴァリン (Bāvarin) という婆羅門の弟子たち 16 人が Godhāvarī 河畔を出発して Ujjeni、Kosambi、Sāvattthī、Kapilavatthu、Vesālī などを経めぐって Rājagaha に到着したとされている。こ

のような貴重なデータを無駄にしたいくないためもあり、また【6】「原始仏教聖典に記されたルート①——南道と北道——」で考察する「南道」とも密接な関係がありそうなので、*Suttanipāta* 005-001 データ中に記されているデカン高原部の他の地名の位置も勘案して、仮に Nanded と比定してみたのである⁽²⁾。

(1) p.190

(2) 塚本啓祥氏によれば、西デカンには多数の仏教遺址（窟院）が散在しているが、それらは紀元前2世紀末ころから紀元後9世紀までの窟院遺址であるという。「南インドの仏教史の問題点」『印度学仏教学研究』（第22巻第2号、1974）

また中村元編著、奈良康明・佐藤良純著、丸山勇撮影『ブッダの世界』（学習研究社、2000）「デカン西部の仏教」によれば「現在のマハーラーシュトラ州を中心にした地域に、十数か所の窟院群遺跡があり、窟院の総数は約千を数える。インド全土の窟院寺院は約千二百というから、そのほとんどがこの西デカンに集中している。ヒンドゥー教やジャイナ教の窟院もあるが、千の窟院のうち約80%が仏教窟であり、比丘の住処たる精舎（ヴィハラー）窟と礼拝堂（チャイティヤ）窟から成り立っている。仏教徒は、おおよそ前2世紀末葉ないし前1世紀初頭から開窟をはじめ、途中で中断の時期はあったにせよ、西暦9世紀まで開窟の活動は続いた」（p.313）とする。

[12] カジャンガラ (Kajāṅgala)

Skt. :

漢訳：伽郎婆羅聚落

[12-1] *Kajāṅgala* は、【7】「原始仏教聖典に記されたルート②——中国と辺国——」において述べるように、『パーリ律』や『十誦律』では中国と東の辺国の境とされるところである。*MN.152 Indriyabhāvanā-s.*⁽¹⁾ や *AN.010-003-028*⁽²⁾、『雑阿含』282⁽³⁾ などでは釈尊もここに住されたことがあるとされている。

(1) vol.III p.298

(2) vol.V p.028

(3) 大正02 p.078上

[12-2] 『西域記』は、[7] に記したチャンパー（瞻波国）から東へ行くこと4百余里で、カジャンガラ（羯朱唄祇羅国）に至る。この国は周囲2千余里、伽藍は6、7カ所で、僧徒は3百余人であると伝えている。『西域記』の訳註では *Cunningham* 氏の説をとって、*Jharkhand* 州 *Sahebganj district* にある都市 *Rajmahal* に比定している⁽¹⁾。われわれもこれを採用しておく。

この *Rajmahal* は *Ganga* 河下流の南岸（右岸）にある町で、その位置を駅名 *Rajmahal Railway Station* の地点で示せば、北緯 $25^{\circ} 03'$ 、東経 $87^{\circ} 50'$ となる。

『西域記』の記述では、ここから東にガンジス河を渡って、その北岸を6百余里行けば、[28] に記すブンナヴァッタナ (*Puṇṇavaddhana*、奔那伐弾那国) に至るという⁽²⁾。そしてその後「東印度の境」に入る。まさしくここから東へ行くと辺国であって、【7】「原始仏教聖典に記されたルート②——中国と辺国——」に論じるように、仏教中国は時代が進むにしたがって広くなり、そこで東の中国と辺国の境は *Kajāṅgala* から *Puṇṇavaddhana* に移っ

たのである。

- (1) 『西域記』3 p.206 の註1
- (2) 同上 pp.204~6

[13] カンナクツジャ (Kaṇṇakujja)

Skt. :

漢訳：建拏城、拏鞠社城、伽那慰闍国、慰闍国、曲女城

[13-1] Kaṇṇakujja を仏在処・説処とする経典はない。しかるになぜ基準地としてあげたかと言えば、貴重な遊行データである『パーリ律』「波羅夷 001」⁽¹⁾ に、Verañjā から Vesāli に至る経由地の1つとしてあげられるからである。また『パーリ律』「七百犍度」⁽²⁾、『四分律』「七百集法毘尼」⁽³⁾ の遊行記事にも登場する。

- (1) vol.III p.011、次節【2】基礎データ [6-5] -01 参照
- (2) vol.II p.298、次節【2】基礎データ [3-65] -01 参照
- (3) 大正 22 p.969 中、次節【2】基礎データ [4-12] -01 参照

[13-2] Kaṇṇakujja (Skt. で Kanyakubja という。原始仏教聖典のサンスクリット対応経に現れないので上記ではこれを紹介していない) は、7世紀の初めに詩人としても名高い戒日王 (Harṣavardhana) が出て大いに栄えた。玄奘もこの王と会見している。その都城址が現在の Uttar Pradesh 州 Kannauj district の都市 Kannauj に残され、仏教碑銘も発見されている⁽¹⁾。

『法顕伝』はこの地には2つの僧伽藍があり、小乗学であったとし⁽²⁾、『西域記』は周囲4千余里、国の大都城は西はガンジス河に臨み、その長さ10余里、幅が4、5余里であるとし、そこには伽藍が1百余カ所、僧徒が1万余人がいて、大乘と小乗の二乗を兼ねて学習しているとしている⁽³⁾。

この地の緯度・経度を駅名 Kannauj City Railway Station で示せば、北緯 27° 02′、東経 79° 54′ となる。

- (1) 塚本啓祥『インド仏教碑銘の研究』I (平楽寺書店、1996 以下『碑銘の研究』と略す) 「碑銘 Kanauj1」 p.612
- (2) 『法顕伝』 p.066
- (3) 『西域記』2 pp.183~4

[14] カピラヴァットウ (Kapilavatthu)

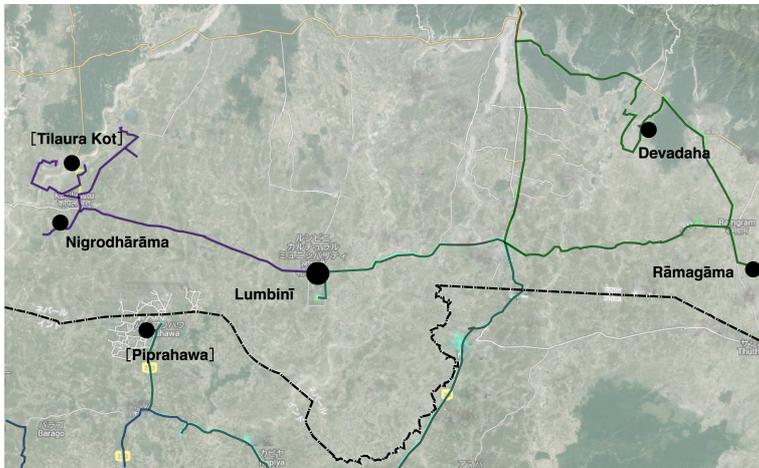
Skt. : Kapilavastu

漢訳：迦毘羅衛城、迦毘羅越城、迦維羅衛城、劫比羅城、迦維羅衛国、迦羅衛国、迦毘羅国、劫比羅国、迦毘羅婆国、迦維羅衛、加維羅衛、加鞞羅衛、迦毘羅越、迦毘羅衛、赤沢国

[14-1] Kapilavatthu はいうまでもなく釈迦族の首都であり、釈尊が幼・少・青年期を過ごされた故郷である。

【1】通商・遊行ルートを設定するための基準地点とその位置確定

現在 Kapilavatthu の古城址の候補地としては Tilaura Kot (1) と Piprahwa があげられている。Piprahwa は仏塔から釈尊の遺骨が発見されたとされる場所である。



【釈迦国地図】 (石井照彦 作成)

釈尊の誕生地 Lumbinī は古代釈迦国の故地のなかで、唯一その地点が確定され疑いがもたれていない場所であるから、これを中心とした釈尊や原始仏教時代の故事に係わる地図を下に「釈迦国地図」として掲げておいた。Nigrodhārāma としては現在の Kudan 遺址である。これはわれわれがネパール・インドを訪れ、実際に

GPS で計測調査して作成したものであって、遺址と遺址をむすぶ線はわれわれのたどったルートの記録であり、破線はインドとネパールの国境を示す。また遺跡名に [] を付したのはパーリ語地名でなく現在の地名である。

釈尊は生母マハーマーヤーが Kapilavatthu からその郷里の Devadaha に里帰りの途中 Lumbinī に立ち寄り、そこで生まれたとされる。この地図で Tilaura Kot、Piprahwa、Lumbini、Devadaha の 4 者の関係を見てみると、Piprahwa と Lumbini と Devadaha はほぼ直線上に並んでいるから、そういう意味では Kapilavatthu 城址は Tilaura Kot より Piprahwa であると考えの方が合理的である。里帰りの途中に Lumbinī があったとすると Tilaura Kot はすこし北にずれすぎている。また距離も Piprahwa は現在インド領にあるが、距離は Tilaura Kot よりも Piprahwa の方が Lumbinī に近い。



Tilaura Kot 遺址



Piprahwa 遺址

しかしながら Piprahwa は明らかに僧院址であって城跡ではない。このような意味では Tilaura Kot の方が城址らしく見える。

- (1) 中村瑞隆・久保常晴・坂詰秀一立正大学ネパール考古学調査団『ティラウラコット本文編』(雄山閣、2000.12) TILAUURA KOT VOL. I、第3章「ティラウラコット遺跡第Ⅶ号丘の調査」p.087 以下、ならびに第4章「ティラウラコット遺跡第Ⅱ号丘の調査」p.199 以下

を参照。

[14-2] 本稿にのせる地図程度では両者の位置をそれほど厳密に示す必要はないのであるが、とりあえずここでは **Kapilavatthu** の古城址は **Tilaura Kot** であったと考えておく。ここは **Lumbini** 州 **Taulihawa** にあり、その緯度・経度を示せば、北緯 27° 34′、東経 83° 03′ である。

[14-3] 『法顕伝』によれば、城中に王民なく荒れ果てて、僧徒がいて民家が数十軒あるだけとし、スッドーダナ (**Suddhodana**、白淨) 王の故宮には太子入胎の像、四門出遊に困んだ場所にある塔、太子の箭が東南方 30 里の所に入り泉水が吹き出した処、成道後に初めて父王と会われた処、釈尊の育て親のマハーパジャーパティエー・ゴータミー (**Mahāpajāpatī Gotamī**、大愛道) が僧伽梨を布施した処、ヴィドゥーダバ (**Viḍūḍabha**、瑠璃) 王による釈迦族の殺戮の場所等々のほか、城の東北数里の王田、すなわち太子が樹下で耕者を見た処について伝えている (1)。

『西域記』によれば、カピラヴァットゥは周囲 4 千余里で、王城は崩れてどの程度の範囲かも定かでなく、その中の宮城は周囲 14、5 里で、その基址がしっかりと残っていたという。また伽藍の跡も 1 千余カ所、宮城の側に伽藍が 1 つあり、僧徒が 3 千余人いて、小乗の正量部の教えを学んでいると伝えている (2)。

(1) 『法顕伝』 pp.079~080

(2) 『西域記』 2 pp.266~7

[15] コーサンビー (Kosambī)

Skt. :

漢訳：橋閃毘城、橋賞弥城、拘舍弥城、拘深城、拘睺弥国、俱舍弥国、拘睺毘国、拘舍弥国、橋閃毘国、拘舍弥、橋賞弥、拘睺弥、拘舍弥、俱睺弥、俱舍弥、橋閃毘、拘深

[15-1] **Kosambī** は、釈尊時代には四大国の 1 つにも数えられることのある **Vaṃsa** 国の首都で、仏教史的には釈尊教団の中に初めて破僧事件が起こったところである。Yamuna 河のほとりに城址も残っており、そのほかこの地の長者であったゴーシタ (**Ghosita**) 長者が建てたゴーシタ園 (**Ghositārāma**、瞿師羅園) の僧院跡も残っていて、このなかにアショーカ王の石柱法勅がある。

コーサンビーの仏教史については『モノグラフ』第 14 号に掲載した【論文 19】「コーサンビーの仏教」を参照されたい。

[15-2] この地はいま **Kosam** と呼ばれており、Ganga 河と Yamuna 河の合流地点にある大都会 Allahabad の近くの Uttar Pradesh 州 Kaushmbi district にある。これを Ghositarama Monastery 遺跡のアショーカ石柱法勅がある場所で示せば、北緯 25° 20′、東経 81° 23′ となる。

[15-3] 『法顕伝』はむかしのゴーシタ園には今も多くの僧侶がいて、小乗を学ぶものが多いとしている (1)。

『西域記』は、その国は周囲 6 千余里、国の大都城は周囲 30 余里であり、また伽藍は 10 余カ所あるが崩れ倒れ荒れ果てているとし、僧徒は 3 百余人で小乗の教えを学んでいる、と

している。またゴーシタ (Ghosita、具史羅) 長者の旧宅やアショーカ王建立の高さ 2 百余尺のストゥーパなどのことも記している (2)。

- (1) 『法顕伝』 p.125
- (2) 『西域記』 2 p.229、pp.232~3

[16] クシナーラー (Kusinārā)

Skt. : Kuśinagari

漢訳 : 拘夷那竭城、拘尸那竭城、鳩尸那城、拘尸那城、拘尸城、拘夷城、鳩夷那竭国、鳩尸那竭国、拘尸那竭国、拘尸那国、拘夷国、那竭国、拘夷邑、拘尸那竭、鳩尸那、拘尸那

[16-1] Kusinārā は、四大聖地の一つに数え上げられ、釈尊が入滅された地で、釈尊時代には十六大国の 1 つマッラ国内にある村であった。

この地は現在は Kasia とよばれ、Uttar Pradesh 州 Kushinagar district にある。

[16-2] ここには仏舎利を祀ったとされるストゥーパがあり、そのそばにビルマの僧侶が立てた Parinirvana Temple があり、今でもたくさんの参拝者が巡礼に訪れている。この場所を緯度・経度で示せば北緯 26° 44′、東経 83° 53′ となる。

この地にはほかに釈尊の遺体を荼毘に付した場所に ‘マクタバンダナ塔廟 (Makuṭabandhana cetiya, Skt. Makuṭabandhana caitya、天冠寺、天観寺、宝冠支提、繫冠制底、漚茶廟、漚茶神地、漚茶地、頂結支夷)’ とよばれるチエーティヤが建てられたとされ、その遺跡とされる Ramabhar Stupa も今に残されている。このそばを流れるのが『涅槃経』にも登場する Hirañnavatī (Skt. Hiraṇyavatī、希連禅河) 川である。

[16-3] 『法顕伝』は、クシナーラー城 (拘夷那竭城) の北、ヒラニヤヴァティー河の辺りにあるサーラ双樹、すなわち仏が般涅槃された処があり、釈尊最後の弟子スバダ (Subhadda、須跋) が得道した処、入棺して 7 日間供養した処、仏舎利を八分した処など、すべてのところに塔が建てられ、僧伽藍があって今も現存しているとしている (1)。

『西域記』は、国の城郭は崩れ落ち、村里もさびれていて、古城の煉瓦の基址は周囲 10 余里であり、住民も少なく荒れ果てているとしている (2)。

このようにクシナーラーは、法顕が訪ねた西暦 404、5 年頃 (3) から玄奘が歴訪した 630 年前後頃 (4) までの間に荒廃が進んだのである。

- (1) 『法顕伝』 pp.086~8
- (2) 『西域記』 2 p.302
- (3) 長澤氏の法顕年表から推定し、法顕は 404 年 6 月 16 日~8 月 15 日の間、Saṅkassa で雨安居を過ごし、各地を巡歴し 405 年 (義熙元年) ~407 年 (義熙 3 年) の間 Pāṭaliputta に滞在するので、Kusinārā には恐らく 404 年後半~405 年前半の頃に訪問したのではなかろうかと考えられる。長澤和俊『法顕伝 訳注・解説』(雄山閣、平成 8 年) 「法顕が遊歴した諸国・年月一覧表」 p.191
- (4) 前嶋氏によれば、玄奘は Kasmira に 628 年 (貞観 2 年) 末~629 年の 2 年滞在し、再び旅路につき、Nālandā 寺院には 630 年 (貞観 4 年、29 歳) の初秋から 635 年 (貞観 9 年、34 歳) まで戒賢に就いて学ぶとするので、恐らく Kusinārā には 630 年頃に訪れたのでは

なかろうかと思われる。前嶋信次『玄奘三蔵』（岩波新書 105、1980）pp.046、093

[17] ルンビニー (Lumbinī)

Skt. :

漢訳：藍毘尼園、嵐毘尼園、藍毘尼林、隆頻林

[17-1] Lumbinī いうまでもなく釈尊降誕の地である。現在のネパール連邦民主共和国の南部タライ平原にある Lumbini Zone の Rupandehi district にある小さな村 Lumbini から、「天愛喜見王は、灌頂〔即位〕20年に (Devānapiyena Piyadasina lājina vīsati-vasābhisitena) 自ら〔ここに〕来て崇敬した。『ここで仏陀・釈迦牟尼が生誕された』と (hida Budhe jāte Sakyamunī [']ti) 〔伝えられる〕自然石を〔保護する〕柵 (または壁) を伴った〔建造物を〕設営せしめ、また石柱を建立せしめた。ここで世尊が生誕された故に、ルンビニー村は租税を免ぜられ、また〔生産の〕1/8を支払う (六分税から八分税への減税) ものとせられる (hida Bhagavaṃ jāte [']ti Luṃminigāme ubalike kaṭe aṭṭhabhāgiye ca) 」⁽¹⁾ と刻まれたアショーカ王の石柱法勅が発掘されたので、疑いもなくここが釈尊生誕の地であるということが確認される。

この南部タライ平原は、ヒマラヤ山脈の麓といっても海拔 100 メートル前後しかない低湿地であり、かつてはマラリヤが蔓延して人が住めないといわれた地方であった。現在この地方にはタルー人と呼ばれる民族が住んでいるが、彼らはマラリヤに免疫を持っているとされる。

この石柱の位置を緯度・経度で示せば、北緯 27° 28′、東経 83° 16′ であり、ちなみに海拔は 100 メートルである。その地理的位置関係は [14] カピラヴァットゥに掲げた釈迦国地図を参照されたい。

(1) 塚本啓祥「ルンミンデーイーのアショーカ石柱刻文再考：マヤ堂出土の『自然石』に関連して」(『法華文化研究』第30号、2004) p.024

[17-2] 『法顕伝』は、カピラヴァットゥ城の東 50 里の王園、すなわちルンビニー (論民) での釈尊降誕にまつわる聖処や洗浴の池水を飲む僧侶のしきたりを伝えるも、この国が非常に荒れ果て、人民も極めて少なく、道路には象や師子が出没して恐ろしく、みだりに行かないほうがよいと伝えている⁽¹⁾。

『西域記』は、そこには釈迦族の水浴池があり、その北 24、5 歩の所に、今は枯れてないが無憂花樹があつて菩薩の降誕された処であるとし、その近くにはアショーカ王の建てた石柱があり、上に馬の像が作つてあるがその柱は落雷で折れて、大地に倒れていると伝えている⁽²⁾。

(1) 『法顕伝』 pp.080~2

(2) 『西域記』 2 pp.287~291

[18] マドゥラー (Madhurā)

Skt. :

漢訳：摩都量城、摩偷羅城、摩偷羅国、末度羅国、摩偷羅、麼土羅

[18-1] *Madhurā* は *Mathurā* とともに表記されるが本稿では *Madhurā* を採用する。ここは釈尊時代から宗教都市として知られていたが、釈尊がこの地に足を踏み入れられたかどうかははっきりしない。これについては後述する。

[18-2] *Madhurā* は、現在も Uttar Pradesh 州の Mathura district にある Mathura として大いに栄え、Yamuna 河沿いの北には Delhi があり、南には Agra という大都市があってその中間に位置する。ここには付近の遺跡から発見された仏教やジャイナ教の数々の遺品を収容したマトゥラー歴史博物館 (Mathura Museum) があり、ここを緯度・経度で示せば、北緯 27° 29′、東経 77° 40′ となる。

[18-3] 『法顕伝』は、ヤムナー河 (遥捕那河) の左右には 20 の僧伽藍があり、僧侶は 3 千人もいて仏教が盛んであった、としている⁽¹⁾。また僧侶が住む処には舍利弗の塔、目連・阿難の塔、阿毘曇・律・経塔が建てられていて、比丘尼は阿難の塔を、沙弥はラーフラの塔を、阿毘曇の師は阿毘曇の塔を、律師は律の塔を供養し、また摩訶衍の人は般若波羅蜜、文殊師利、光世音 (観世音) などを供養していると伝えている⁽²⁾。

『西域記』は、この国は周囲 5 千余里、国の大都城は周囲は 20 余里である。ここでは伽藍が 20 余カ所で、僧徒は 2 千余人、大乘と小乗を兼学すると伝えている⁽³⁾。

(1) 長澤和俊『法顕伝 訳注・解説』(雄山閣、平成 8 年 9 月) p.044。なお『僧祇律』「尼薩耆波夜提 002」(大正 22 p.295 上)によれば、ヤムナー河の東に「仙人聚落精舎 (Skt. *Rṣigrāma vihāra*)」、西に「叢林精舎 (Skt. *Pinḍavana vihāra*)」があるという。『赤沼』‘*Pinḍavana vihāra*’ p.504b、‘*Rṣigrāma vihāra*’ p.550a 参照

(2) 長澤同上書 p.047

(3) 『西域記』2 pp.140~1

[19] マーヒッサティ (*Māhissati*)

Skt. :

漢訳 :

[19-1] *Māhissati* は、*Suttanipāta 005-001*⁽¹⁾ の *Godhāvarī* 河畔に住むバーヴァリンという婆羅門の弟子 16 人が釈尊に拝謁するために大旅行したルートの出発地点として登場する。また *DN.019 Mahāgovinda-s.* には「アヴァンティ人の *Māhissati* (*Māhissati Avantiṇam*)」とある⁽²⁾ から、アヴァンティ国内の町であったことがわかる。

(1) p.190、次節【2】基礎データ [9-①] -01 参照

(2) vol.II p.235、『モノグラフ』第 13 号【論文 15】「パーリ仏典に見る *janapada* と *raṭṭha*」p.156 ならびに p.158 の註 (1)、*Malalasekera II* p.623 ‘*Māhissati*’ 参照

[19-2] *Cunningham* 氏によれば、ここは現在の Madhya Pradesh 州 Khargone district の都市 Maheshwar に比定されている⁽¹⁾。デカン高原の北部にある [37] に記す *Ujjeni* (現在の Ujjain) から南に下ったところで、われわれもひとまずこれを採用する。その地を Maheshwar Bus Stand の位置で示せば北緯 22° 10′、東経 75° 35′ となる。

- (1) *Cunningham* pp.488~9. なお位置に関しては塚本氏が諸説を紹介している。『改訂増補・初期仏教団史の研究』（山喜房仏書林、昭和55年2月）p.595

[20] マンクラ山 (Maṅkulapabbata)

Skt. :

漢訳：慢求羅山、莫俱山

[20-1] Maṅkula (Makula) pabbata は、パーリの註釈書や『僧伽羅刹所集経』などが釈尊が成道第6年に雨安居を過ごされたとするところである⁽¹⁾。ただし原始仏教聖典にはここで釈尊が雨安居を過ごされたという記述はない。

またパーリ聖典にはこの地に言及するところはないが、漢訳『雑阿含』111~129⁽²⁾に「摩拘羅山」、『雑阿含』1320⁽³⁾に「摩鳩羅山」という地名がみられ、これが Maṅkula pabbata に相当するものと考えられる。

(1) 『モノグラフ』第5号【論文5】岩井昌悟「原始仏教聖典に記された釈尊の雨安居地と後世の雨安居地伝承」p.071

(2) 大正02 pp.037下~041上

(3) 大正02 p.362上

[20-2] 本総合研究分担者の岩井昌悟は Maṅkulapabbata を現在の Bihar 州の Munger (Monghyr) 近郊に比定している⁽¹⁾。Munger は Ganga 河の Patna よりも下流の南岸にある都市であって、緯度・経度で示せば北緯 25° 22′、東経 86° 28′ となる。

ここはデカンの高原部が Ganga 河のそばまで出張しているところであり、もしマガダ国の首都 Rājagaha からその属国であったアング国の首都 Campā に直通する道があったとしたらここを迂回していたであろう。

また Ganga 河南岸に沿って Pāṭaligāma から Campā に通じている道もここを通過していたであろうと考えて基準地とした。

(1) 岩井昌悟「マンクラ山—釈尊の第6年雨安居伝承地—について」（『印度学仏教学研究』第53巻第1号、平成16年12月）、ならびに『西域記』3 p.201 註1

[20-3] 『西域記』のいう伊爛拏鉢伐多国（イーラナバルヴァタ国）は Munger にあてられるが、ここは北にガンジス河があって、周囲3千余里、大都城の周囲は20余里、伽藍は10余カ所、僧徒は4千余人、多くは小乗の正量部の法を学んでいると伝えている⁽¹⁾。さらに隣国の王がこの国の王を廃して王城を僧徒に開放し、2つの寺を建立し、それぞれ1千人ほどの僧侶がいて、小乗の説一切有部を学んでいると記している⁽²⁾。

なお前嶋氏によれば、玄奘はここで一年間滞在し、貞観10年に35歳の春を迎えたとしている⁽³⁾。玄奘はその後ガンジス河の南岸を300余里下ってチャンパー（瞻波国）へと向かっている。

(1) 『西域記』3 p.194

(2) 同上書 p.194

(3) 前掲書 p.095

[20-4] 紹介すべき仏教遺跡はないが、Munger やその近郊の Uren 出土の碑銘が発掘されている⁽¹⁾。

- (1) 『碑銘の研究』「碑銘 Mungel¹」 p.162、同「碑銘 Uren¹〜3」 p. 216

[21] ミティラー (Mithilā)

Skt. :

漢訳：蜜締羅国、弥締羅城、弥替羅聚落、弥薩羅

[21-1] Mithilā はかつてはヴィデーハ (Videha) 国の首都であった。ヴィデーハ国は西の Gandak 河、東の Koshi 河、南の Ganga 河、北の Mahābhārat 山脈を境界とする広大な版図をもっており、ヴァッジ国の首都であった Vesālī の北部に位置していたが、釈尊の時代にはヴァッジ連合に取り込まれて弱小化していた⁽¹⁾。

この周辺には原始仏教聖典に記される目ぼしい地名はないが、かつては繁栄していたヴィデーハ国へ向けてのルートが存在したであろうと考えて、ここを基準地点の1つに加えた。

- (1) 『モノグラフ』第15号【補註1】「Videha (ヴィデーハ国)」(執筆：岩井昌悟) p.613

[21-2] インドの古典叙事詩『ラーマーヤナ (Rāmāyaṇa)』によれば、ラーマ (Rāma) 王子の後シーター (Sītā) は Mithilā のジャナカ (Janaka) 王の娘とされており、この関係から古代の Mithilā は現代の Janakpur に比定される。Janakpur はネパール連邦民主共和国の東南部のインドとの国境付近にある Janakpur Zone の Dhanusa district にあり、その緯度・経度を駅名 Janakpur Railway Station の位置で示せば、北緯 26° 44′、東経 85° 56′ である。

[22] ナーランダール (Nālandā)

Skt. :

漢訳：那羅健陀城、那難陀、那爛陀、羅羅健陀

[22-1] Nālandā には紀元5世紀ころにグプタ王朝の保護を受けて大寺院が建設された。しかし法顕が旅行した410年ころにはまだ建設されておらず、単に舍利弗本生の村である那羅聚落に至ったとするのみである⁽¹⁾。しかしその200余年後に訪れた玄奘はそこには僧徒数千人が住んでいたとし、当時のインド仏教研究の一大拠点であったと伝えている⁽²⁾。なお玄奘はここに5年間滞在して唯識を学んでいる。

- (1) 『法顕伝』 p.102

- (2) 『慈恩伝』(大正50 p.237中〜下)によれば、僧徒の主客1万人いて、大乘を学びつつ十八部を兼学し、寺内の講座が1百余カ所に及び、学徒が寸暇を惜しんで学び、国王をはじめとする多くの人々が彼らを支えていたという。

[22-2] 釈尊時代にはここには僧院が建てられていなかったようで、釈尊は Nālandā ではパーヴァーリカ長者 (Pāvārika seṭṭhin, Pāvāriya seṭṭhin, Dussapāvārika seṭṭhin) が仏教サンガに寄進したとされる園林 'Pāvārikambavana (波波利菴婆林)' に住するのを常とされていた。おそらくグプタ時代の Nālandā 寺院はここに建てられたものであろう。その

地は現在の Bihar 州 Nalanda district の Bargaon 村にあり、その地点は北緯 25° 08′、東経 85° 26′ である。

なおこの Nālandā 遺跡からは碑銘も数多く発掘されている (1)。

(1) 『碑銘の研究』 「碑銘 Nālandā1~45」 pp.194~207

[23] パータリ村 (Pāṭaligāma)

Skt. : Pāṭaligrāmaka

漢訳：波羅利子城、波吒離子城、巴連弗城、巴陵弗城、婆羅梨弗国、巴連弗邑、波吒離邑、巴隣聚、巴連弗、波羅利弗、波吒離

[23-1] Pāṭaligāma は、現在の Bihar 州の州都 Patna として大発展しているが、釈尊の晩年にはまだ「村」であって、そこにマガダ国王阿闍世 (Ajātasattu) によって城砦が建設されている途中であった。おそらくそのときに建設されていた大城砦がそのまま現在の Patna 市と重なるのではないかと思われる (1)。

(1) 『モノグラフ』第 19 号に掲載した【研究ノート 9】「『涅槃経』の遊行ルート——特にガンガー河とガンダク河の渡河地点について——」 p.201

[23-2] 後に詳述するように釈尊時代の Pāṭaligāma には未だ Ganga 河の渡し場としての港湾施設が出来ていなかったが、それは軍事上の要請によるものであって、実質的には陸上交通路としても、水上交通路としても幹線ルートの重要な位置にあったものと考えられる。

当時の Pāṭaligāma の比定場所を、マウリヤ王朝時代の宮城址とされる Kumhrar 遺跡公園 (Kumhrar Excavation Park) の地点で示せば北緯 25° 35′、東経 85° 11′ となる。

[23-3] 『法顕伝』によれば、アショーカ王の宮殿が残存し、アショーカ王塔の附近には大乘の僧伽藍が造られ、小乗の寺もあって 6、7 百人の僧侶がいたという (1)。

『西域記』は、パータリプトラ城 (Skt. Pāṭaliputra、波吒釐子城) はガンジス河の南にあり、周囲 70 余里の故城はすでに荒廃し、基礎を残しているだけと伝える (2)。そして故宮の北に最後の遊行のときに踏まれた仏足石と、その側に高さ 30 余尺のアショーカ王の石柱があって、そこには大略「アショーカ王は信心堅固で、三度瞻部州をば仏法僧に布施し、三度諸の珍宝をもって復び自分で買い戻した」と記されていた、と伝えている (3)。ただしこの石柱は現在は残されていない。

(1) 『法顕伝』 pp.096~7

(2) 『西域記』 3 p.022

(3) 同上書 pp.032~4、足立喜六『大唐西域記の研究 下』 (法蔵館、1943) pp.593~4

[24] パティッターナ (Patiṭṭhāna)

Skt. :

漢訳：

[24-1] Patiṭṭhāna は、*Suttanipāta* 005-001 (1) に記されるバーヴァリンという婆羅門

の16人の弟子たちが釈尊に会うために、はるばると旅をしたその中に現われる地名で、**Godhāvārī** 河畔を出発してこの地を經由し、ここから [19] に記した古都 **Māhissati** へと向かったとされている。ここではこの都市を「アラカ (**Aḷaka**) の **Paṭiṭṭhāna**」としているからアラカ国の首都であつたらしい (2)。

(1) p.190、次節【2】基礎データ [9-①] -01 参照

(2) *Malalasekera II* p.127、『赤沼』p.498b

[24-2] **Wilfred H. Schoff** によれば、**Paṭiṭṭhāna** は現在の西インドの Maharashtra 州 Aurangabad district にある都市 Paithan に比定されている (1)。われわれもひとまずこれを採用しておく。Paithan を公園名 Sant Dnyaneshwar Garden の位置で示せば北緯 19° 29′、東経 75° 22′ となる。

(1) 前掲書 *Schoff* p.195

[24-3] なお **Paṭiṭṭhāna** は、プトレマイオス (**Ptolemy**) の地理書にある **Baithana**、**Paitana** に比定されている (1)。また『エリュトウラー海案内記』第51節は「ダキナバデーヌにある商業地のうち最も著名なものが二つあり、バリユガザから二十日の道のりだけ南に距ったパイタンと、これから約十日の距離東にある別の非常に大きな市タガラとである」 (2) とあり、**Paṭiṭṭhāna** (**Paithan**) が「南道」にあって、バリユガザ (**Barygaza**) すなわちパールカッチャ (**Bhārukaccha**) から南方に20日の道のりにある著名な商業都市であったことを伝えている。

(1) 『赤沼』p.498b、*Malalasekera II* p.127

(2) p.134

[25] パーヴァー (**Pāvā**)

Skt. : **Pāpā**

漢訳：波婆城、波波城、波婆国、波波国、波旬国、波波聚落、波梨耶聚落、波波邑、波利邑、波旬邑、波旬、波婆、波利蛇迦 (**Pāveyyaka**)、彼城

[25-1] **Pāvā** は、古代インドの十六大国の一つに数えられるマッラ国 (**Pāli**, Skt. とともに **Malla**、末羅、摩羅、末牟、満羅、壯士、力士) にあつた町で、釈尊最後の遊行で鍛冶屋の息子チュンダ (**Cunda**) から食事供養を受けられた処である。



Pawa Stupa 跡

[25-2] 現在の Uttar Pradesh 州 Kushinagar district にある Fazilnagar もしくは Pawanagar と呼ばれる地区には、釈尊の遺骨が8分され、その1つをマッラ族の人々が祀つたとされる仏塔 (**Pawa Stupa**) が残されている。またチュンダの屋敷跡とする場所もあり、そこにはインド考古局の立て看板も立てられている。

その仏塔 **Pawa Stupa** の地点は北緯 26° 41′、東経 84° 03′ となる。ただし *Footprints* は Bihar

州の Siwan district にある Papapur 村ではないかとしている (1)

(1) J. Pandey 氏前掲書 pp.049～050

[26] パーヴァープリ (Pāvāpurī)

Skt. :

漢訳：波波国、波和国、波和



Jal Mandir Pawapuri

[26-1] Pāvāpurī はジャイナ教のマハーヴィーラ (Mahāvīra) の亡くなった地で、パーリの原始仏教聖典では前項と同じ綴りである ‘Pāvā’ と記されている。そのためしばしば前項の Pāvā と混同される。

しかし『モノグラフ』第 19 号に掲載した【研究ノート 6】「ニガンタ・ナータプッタ (Nigaṇṭha Nātaputta) 死亡年の推定」に記したように、マハーヴィーラの亡くなった地は Nālandā の近くの現在 Pavapuri と呼ばれているところに間違いがない⁽¹⁾から、そこで本稿ではこれら 2 つの地名を区別する

ためにこちらは Pāvāpurī という地名を用いることにしたのである。

(1) p.140

[26-2] Pavapuri は Bihar 州 Nalanda district にあり、Jal Mandir (The Nirvana place of Lord Mahavira) の位置で示せば北緯 25° 05′、東経 82° 32′ となる。

現在ここにはマハーヴィーラのなくなった地であることを記念する上記の Jal Mandir のほかに、その近辺にはマハーヴィーラの遺骨を納めた 2500 年前のストゥーパなるものや Digambara (裸形) 派や Śvetāmbara (白衣) 派のいくつかの寺院が建てられている。

[27] パヤーガパティッターナ (Payāgapatiṭṭhāna)

Skt. :

漢訳：

[27-1] Payāgapatiṭṭhāna は仏在処・説処にはなく、『パーリ律』「波羅夷 001」⁽¹⁾の、釈尊が Verañjā において馬麦を食して雨安居を過ごされたのち、Soreyya、Saṅkassa、Kaṇṇakujja を経て Payāgapatiṭṭhāna で Gaṅgā 河を渡り、さらに Bārāṇasī を経由して、Vesālī まで遊行されたという記事に現われるのみである。

しかし後節【9】の「『原始仏教時代の通商・遊行ルート』地図の想定」に詳しく書くように、インド古代においては東西を結ぶ幹線道路と南北を結ぶ幹線道路があり、この 2 つの幹線道路はこの地で合わさって 1 つになっていたと考えられる重要な地点であるので、この地を基準地としたのである。

(1) vol.III p.011、次節【2】基礎データ [6-5] -01 参照

[27-2] 現在のインド北部 Uttar Pradesh 州 Allahabad district の都市 Allahabad は古代には *Payāga* (Skt. *Prayāga*) と呼ばれていた。Allahabad は Ganga 河と Yamuna 河に挟まれたところにあり、Ganga 河から見ればその南岸にあるが、ここにはさらに神話上の *Sarasvati* 河も合流するとされ、そこでこの地は Triveni Sangam (三河の合流地点) とよばれ、ヒンドゥー教における一大聖地とされている。そして Allahabad の対岸すなわち Ganga 河の北岸にある Jhunsi は、古代には *Patiṭṭhāna* (Skt. *Pratiṣṭhāna*) と呼ばれていた。

パーリ律蔵の *Ṭikā* によれば、「パヤーガ・パティッターナとは、ガンガー河のひとつの勝れた渡し場の名でもあり、それに近接した村の名でもある (*Payāga-patiṭṭhānan ti Gaṅgāya ekassa tittha-visesassā pi, taṃ samīpe gāmassa pi nāmaṃ*)」⁽¹⁾ とあって、*Payāga* と *Patiṭṭhāna* が渡しによって繋がる一つの地域として認識されている⁽²⁾。つまり原始仏教時代には *Payāga* と *Patiṭṭhāna* は併せて1つの地名、すなわち村の名とともに渡し場の名としての '*Payāga-patiṭṭhāna*' として認識されていたということであろう。現在は Allahabad と Jhunsi は別の都市になっているが、同じ Allahabad district にある。

先に述べたように、ここを仏在処・説処とするデータがないということは、原始仏教時代には *Payāga-patiṭṭhāna* は [23] に記した *Pāṭali* 村と同様に、主に渡し場の機能を発揮する幹線道路の主要結節地点ではあったが、大都市というわけではなかったのかもしれない。しかし釈尊当時の大都市であった [15] に記した *Kosambi* の玄関口にあたる場所に位置し、仏教中国から *Kosambi* に行くときには、ここを通らなければならなかったはずである。



Shastri Bridge

Payāga と *Patiṭṭhāna* を結ぶ渡し場を、現在の Ganga 河にかかる Shastri Bridge という橋の中央に仮定するとすれば、北緯 25° 26′、東経 81° 53′ である。

なお [24] に記したようにデカン高原にも *Patiṭṭhāna* と称する地名があったが、このことばは「確立する」「基礎を作る」という意の *patiṭṭhahati* という動詞からできた名詞であるから、普通名詞的な固有名詞として使われ、同じ地名をもつ異なる場所がありえたのであろう⁽³⁾。

- (1) *Vimativinodanī-ṭikā*, MYANMAR vol. I p.097. また *Sāratthadīpanī-ṭikā* (MYANMAR vol. I p.459) では「パヤーガ・パティッターナとは、村の同義語でもあり、渡し場の同義語でもある (*Payāga-patiṭṭhānan ti gāmassa pi adhivacanāṃ titthassa pi*)」とある。ちなみに『マヌ法典』ではプラヤーガ (*Prayāga*) は西の外れと位置づけられている。渡瀬信之『マヌ法典』(中公文庫、1991) p.043
- (2) 『善見律婆沙論』(大正 27 p.710 下) には「直路而去到須離国 (*Soreyya*)。從須離去取波夜伽処 (*Payāgapatiṭṭhāna*)。到已即渡大江。渡已便向婆羅那私国 (*Bārāṇasī*)」とある。
- (3) 岩井昌悟「*Payāga-patiṭṭhāna* について」を参照。なお本論文は『東洋思想文化』(東洋大学文学部紀要 69 集、東洋思想文化学科篇第 3 号) 2016 年 3 月(刊行予定)に掲載。

[27-3] 玄奘は、アヤムカ (Skt. Ayamukha、阿耶穆佉国) から東南に行くこと7百余里で、ガンジス河 (殞伽河) を渡って南に向かい、ヤムナー河 (閻牟那河) の北にあるパヤーガ (Payāga、Skt. Prayāga、鉢羅伽耶国) に至ったとしている。

『西域記』によれば、この国は周囲5百余里、国の大都城はガンジス河とヤムナー河の合流地点にあり、周囲は20余里である。ここには伽藍が2カ所あり、僧徒も少なく、小乗の教えを学んでいると伝えている⁽¹⁾。この後、玄奘は西南に進み、猛獣や象の棲む大森林の中を5百余里を経て、コーサンビー (橋賞弥) へと向かっている⁽²⁾。PayāgapatiṭṭhānaはKosambīの玄関口にあたる場所であった。

『法顕伝』にはこの地についての記述はない。

(1) 『西域記』2 p.219

(2) 同上書 pp.227~8

[28] プンナヴァッタナ (Puṇṇavaddhana)

Skt. :

漢訳：富楼那跋陀那国、満富城

[28-1] Puṇṇavaddhanaは『増一阿含』030-003⁽¹⁾においては仏在処とされるが、対応関係にある『雑阿含』604⁽²⁾では話題のなかでこの地名が挙げられるのみである。『増一阿含』というやや遅くに成立したと考えられる文献のみにしか記されず、【7】の「原始仏教聖典に記されたルート②——中国と辺国——」に論じるように、釈尊時代にはこの地は仏教中国には含まれず東方の辺国にあったことになるから、釈尊はこの地には足を運んでおられないと思われる。

それにもかかわらずこの地を基準地としたのは、より新しい時代に成立した「律蔵」とその関連文献にはこの地が中国と辺国の東の境としてあげられ、この時代には東西を結ぶ幹線道路がここまで達していたと考えられるからである。

(1) 大正02 p.660上、次節【2】基礎データ [3-59] -01 参照

(2) 大正02 p.161中、次節【2】 [2-55] 【参考データ】 -01 参照

[28-2] 『西域記』の訳註によると、この地は現在のバングラデシュ人民共和国 (People's Republic of Bangladesh) 西部のRajshahi Division、Bogra districtのBograの8マイル北にあるMahāsthānに比定されているが⁽¹⁾、BograではPāṭaliputta、Campā、Kajāṅgalaさらにベンガル湾沿岸へと繋がる幹線ルートからはあまりに北にずれすぎているきらいがあるので、われわれはもう少しガンジス河沿いに近い、Padma河の北岸 (左岸) の都市Pabna (Pubnaとも) に比定しておきたい⁽²⁾。その地をPabna Old Bus Staitonの地点で示せば北緯24° 00′、東経89° 14′である。

(1) 『西域記』3 p.208 註2

(2) 詳細は後節【7】を参照願いたい。

[28-3] 『西域記』ではこの国は奔那伐弾那国と表記されており、その国の周囲は4百余里、大都城は周囲30余里で、そこでは伽藍は20余カ所、僧徒は3千余人で大小の二乗を兼学している、と伝えている⁽¹⁾。『西域記』ではこの後の記述から印度を五つに分けた「東

インドの境」となる。まさしく玄奘時代にはこの地は中国と東の辺国の境界になっていたわけである。

(1) 『西域記』3 pp.207~8

[29] ラージャガハ (Rājagaha)

Skt. : Rājagṛha

漢訳：羅闍城、羅闍祇、王舎城、王舎大城、王城、王舎国、王舎

[29-1] Rājagaha は「王舎城」の名で親しまれている。釈尊時代の四大国の1つというよりも、コーサラ国とともに仏教中国を2分する二大国のその1つのマガダ国の首都である。ビンビサーラ (Bimbisāra、頻婆娑羅) 王が当時の国王であって、釈尊の晩年にはその息子アジャータサットウ (Ajātasattu、阿闍世) 王に取って代わられた。ビンビサーラは釈尊の教えを真っ先に信じた代表的な優婆塞の1人であって、この帰信を受けたことにより仏教はインド社会に公認されたといつてよいであろう。

[29-2] 『法顕伝』と『西域記』によると、王舎城には旧城と新城があるとされ、旧城は釈尊在世時代にビンビサーラ王が住した城であり、新城はその息子のアジャータサットウ王が作った城であるとされる⁽¹⁾。両方共に遺跡が残され、Archaeological Survey of India 発行の *Rajgir* という小冊子によれば、旧城の周囲にある五山といわれる山々を巡る外城壁は40kmから48kmにも及び⁽²⁾、これらの山に囲まれた中心の平地が内城であって、その周囲は7kmに近いとされている⁽³⁾。また新王舎城は旧城のすぐ北側にあつて、この周囲は約5kmとされている⁽⁴⁾。

この2つの城に挟まれたところに竹林精舎 (Kalandakanivāpa Veḷuvana、Skt. Veḷuvana、伽蘭陀竹林園精舎) の址がある。

この地はインド東部 Bihar 州の Nalanda district にあり、竹林精舎の位置は北緯 25° 01′、東経 85° 25′ である。

(1) 『法顕伝』p.102、『西域記』3 pp.123、152。『西域記』には新城建設について別の因縁譚も書かれている。

(2) p.034

(3) p.036

(4) p.008

[29-3] 『法顕伝』は、新王舎城には2つの僧伽藍、城の西門を出て3百歩のところ阿闍世王の建てた高大な仏舎利塔がある、とする。次いで新城を出て南へ4里行くと、五山の内に入る。五山の周囲は城郭のようになっており、それが旧王舎城であるが、その広さは東西5、6里、南北7、8里で荒れ果てて人は住んでいないと伝えている。先に記したのは五山を取り囲む外城の大きさであるが、これは内城をいったものであろう。

そのほか耆闍崛山の旧跡、現存するカラランダカ竹園精舎に僧侶がいて清掃していたこと、精舎の北2、3里のシータヴァナ (Sītavana)、ピッパラ窟 (Pipphaligūhā)、五百結集の行われた七葉窟 (Sattapaṇṇiguhā) などを伝えている⁽¹⁾。

『西域記』は、上茅宮城（旧王舎城）はマガダ国の真ん中にあり、高い山に四面を囲まれた自然の要塞で、西は溪谷沿いの道に通じ、北は山に向かって門が開かれ、東西は長く、南北は狭く、周囲は150余里で、内城の遺址は周囲30余里であった、とする⁽²⁾。一方、新王舎城は外側の城壁がすでに崩壊して跡形もなく、内城も壊れているが、基址だけが高く残っていて、周囲20余里で各面に一門があるとする。そしてアショーカ王の時になってパータリプッタに遷都し王舎城を婆羅門に施したので、今、城中には1千軒足らずの婆羅門が住み、宮城の西南の隅には小さな伽藍が2つあって、諸国の客僧が止宿していると伝えている⁽³⁾。

(1) 『法顕伝』 pp.102~5

(2) 『西域記』 3 p.123

(3) 同上書 p.152 ならびに p.157。なお『釈迦方志』巻下（大正51 p.964中）には「曷羅闍姑利呬（Skt. Rājagṛhi）城」を註釈して「即新王舎城。本寒林地。闍王（阿闍世王）移都所築。当茅城（旧王舎城）東北四里」とある。

[30] サーガラ (Sāgala)

Skt. :

漢訳：婆伽羅国

[30-1] Sāgala は、仏教中国から見れば西北インドのタッカシラー (Takkasilā) の少し手前にあった町で、『パーリ律』「波羅夷002」に「ダルヒカ (Daḥhika) という比丘の弟子が商人のターバンを盗んだ」⁽¹⁾ という記事があり、釈尊時代に仏教の教えがもっとも西北地方に及んでいた地域であることが知られる。この町のことについては『その他国篇』の【補註13】「Sāgala (サーガラ)」(執筆者：金子芳夫)を参照されたい⁽²⁾。

(1) vol.III p.067

(2) p.651 右。なお【補註13】に触れてないが、『雜阿含』641 (大正02 p.180上)に、婆伽羅 (Sāgala) 国という名が登場するので、付け加えておく。

[30-2] Cunningham 氏はこれを現在のパキスタン・イスラム共和国 (Islamic Republic of Pakistan) の Panjab 州 Sialkot district の県都 Śiālkoṭ に比定している⁽¹⁾。その緯度・経度を City Station Sialkot で示せば北緯 32° 29′、東経 74° 32′ である。

(1) Cunningham p.179, Malalasekera II p.1090, 『西域記』2 p.120 の註(1)

[30-3] 玄奘は、カシュミール (Kasmira, Skt. Kaśmīra、迦湿弥羅) に滞在した後、諸都市を経てタッカ国 (Ṭakka、磔迦国) に入り、サーガラ城址 (Sāgala、奢羯羅故城) に至っている⁽¹⁾。『西域記』によればこの故城は周囲20余里でそこには1つの伽藍があり、僧徒が1百余人いて小乗の教えを学んでいたと伝えている⁽²⁾。

このあと玄奘は、いくつかの都市を経て、現在のバイラート (Bairāt, Virāt, 波理夜咀羅) から東へ5百余里のマドゥラー (秣菟羅国) へと向かっている⁽³⁾。

(1) 前嶋氏によれば、カシュミールには貞観2年末~翌3年の大部分、2カ年滞在。数え年27、28歳のときという。前掲書 pp.044~9

(2) 『西域記』2 p.119, pp.127~8

(3) 前嶋氏同書 pp.049~051

[31] サーケータ (Sāketa)

Skt. : Sāketa

漢訳：婆祇陀城、婆祇多城、婆伽陀城、娑羅多城、自来城、桑祇陀国、婆祇提国、婆岐陀国、沙祇国、婆祇国、娑竭陀邑、娑鞞陀邑、娑竭陀、娑羅帝、沙祇

[31-1] Sāketa は、コーサラ国にあった大都市であり、釈尊時代にはコーサラ国の首都は Sāvattihī (舍衛城) に遷都されていたが、それ以前はここが首都であったと考えられている。MN.024 *Ratha-vinīta-s.* (1) では緊急時に Sāketa と Sāvattihī を結ぶためにこの間に7つの駅をおき、馬を用意していたという。

(1) vol. I p.145、対応経『中阿含』009「七車経」(大正01 p.429下)

[31-2] その地点について、学界では古くから Ayodhyā と同じであるのか異なるのか

という議論がなされてきた。たとえば Cunningham 氏は Sāketa と Ayodhyā を同一視して『ラーマヤナ』の記述からここは Sarabhū (Skt. Sarayū、現在の Ghaghara) 河のほとりにあったとする (1)。また T. W. Rhys Davids 氏はこの2つの町はロンドンとウェストミンスターのように隣り合っていたと考えていた (2)。

われわれも仏蹟調査のついでに現在の Ayodhya を訪ねてみた。百聞は一見にしかずで、鉄道の Ayodhya 駅前にインドのツーリズムが経営しているホテルがあり、その名前は何と 'Hotel Saketa' であった。また市内には K. S. Saket PG College という学校もあり、これを見ても Ayodhya の人びとやインド政府は Ayodhya が原始仏教時代の Sāketa であると認識していることが知られる。われわれもこの認識に従いたい。

ただし原始仏教聖典には Ayodhyā (Pāli: Ayojjhā) という地名はほとんど現われず (3)、しかも Sāketa とはまったく異なる場所をさすようであるから、おそらく現代の Ayodhya と原始仏教聖典の Ayojjhā を identify することはできないであろう。

Sāketa を駅名 Ayodhya Railway Station の地点で示せば北緯 26° 47'、東経 82° 12' となる。

(1) Cunningham p.405

(2) 中村了昭訳『仏教時代のインド』p.028

(3) 全釈尊伝データ (12010 件) のうちで仏在処・説処を Ayojjhā とする聖典は4データで、SN.022-095 (vol. III p.140) と、その対応経『雑阿含』265 (大正02 p.068中) 「阿毘陀処」と、さらに『雑阿含』1174 (大正02 p.314下) 「阿毘闍」と『増一阿含』040-007 (大正02 p.741中) 「阿踰闍」とであるが、『雑阿含』1174の対応経 SN.035-200 (vol. IV p.179) は Kosambī を仏在処・説処としている。そのほか Ayojjhā の地名をあげる聖典に『根本有部律』「葉事」(大正24 p.048下) 「無能敵城」と『根本有部律』「破僧事」(大正24 p.101中) 「無闍城」「無戦城」がある。したがってパリー文献と漢訳とが一致した情報をもつ資料はたった1データしかないことになり、われわれ



ホテル・サーケータ

【1】通商・遊行ルートを想定するための基準地点とその位置確定

の原始仏教の聖典観からすれば、それだけ Ayojjhā に対する認識度が低いということになる。ちなみに Sāketa という地名を挙げる聖典は 68 データで、そのうち仏説処・在処とする聖典は 16 データある。

[31-2] 法顕は、カンナクツジャ (Kaṇṇakujja、罽饒夷城。今の Kanauj) から南へ 3 由延の呵梨 (Hāriti) という村を経て、東南へ行くこと 10 由延でサーケート (Sāketa、沙祇大国) に到り、そしてこの後舎衛城に至っているから (1)、まさしくサーケートは現在の Ayodhya に相当する。

しかしながら『西域記』はサーケートについては言及せず、その代わりにアヨーディヤー (阿踰陀国) について述べている (2)。しかしこのアヨーディヤーは法顕のいうサーケートの位置とは異なり、また現在のアヨーディヤーとも一致しないように見える。要するに古代のサーケートとも現代のアヨーディヤーとも違う場所をアヨーディヤーと呼んでいるように見えるのであるが、これらの旅行記のルートについては、後節【8】「インド古典に記されたルート」で検討する。

(1) 『法顕伝』 pp.066~8

(2) 『西域記』2 p.208

[32] サンカッサ (Sankassa)

Skt. :

漢訳：僧羯奢城、僧迦舎城、僧羯世城、僧迦奢国、僧迦尸国、僧迦賒国、僧迦尸、僧迦遮、僧伽舎

[32-1] Sankassa は釈尊が三十三天で雨安居を過ごされ、仏母マーヤー夫人に説法されたのちに降下されたという伝説の地である。

[32-2] この地は現在の Uttar Pradesh 州 Farrukhabad district にある Fatehgarh 近郊の村 Sankisa に比定されている。詳しいことは『その他国篇』の【補註 10】「Sankassa (サンカッサ)」(執筆者：森章司)を参照されたい (1)。ここで発見されたアショーカ石柱法勅 (2) のある場所を示せば、北緯 27° 20′、東経 79° 16′ となる。

(1) p.641 右

(2) 「碑銘 Sankisā1」 p.895、Harry Falk *Aśokan Sites and Artefacts*, 2006, Mainz am Rhein (以下 *Harry Falk* と略) p.206

[32-3] 『法顕伝』は、世尊が三十三天から下りてきたという階段の上に、後年アショーカ王が精舎を建て、その中階に一丈六尺の仏立像を作り、精舎の後ろには高さ 30 肘の石柱を立てた、としている。また世尊の沐浴された所に建てられた浴室が残っていて、優鉢羅比丘尼 (『増一阿含』036-005 に優鉢羅色比丘尼とある) (1) が初めて世尊を礼拝した処にも塔が立ち、仏在世時に髪や爪を切って塔を作った処など、すべて塔があって現存していると伝えている。また三十三天から下った場所にも塔が建ち、僧尼が 1 千人ほどおり、みな食事を一緒にし、大小乗を雑えて学んでいると記している (2)。

法顕は、元興 3 年 (西暦 404) にサンカッサの竜精舎で夏坐を過ごし、その後カンナクツジャ (Kaṇṇakujja、罽饒夷城。現在の Kanauj) へと向かっている (3)。

『大唐西域記』の巻第四のカピタカ国 (Skt. Kapitthikā, Kapitthika、劫比他国) は、旧名サンカッサ国 (Sankassa, Skt. Sāṃkāśya、僧迦舍。現在の Sankisa) のことである。その国は周囲 2 千余里、国の大都城は周囲 20 余里である、としている。そこには伽藍が 4 カ所あり、僧徒が 1 千余人いてみな小乗の正量部の教えを学んでいるとする。また城の東 20 余里に如来が三十三天から戻られた大伽藍があり、僧徒は数百人で正量部の教えを学び、数万人の淨人が寺の側に住んでおり、その傍らにアショーカ王の建てた高さ 70 余尺の師子頭の石柱があったという⁽⁴⁾。そのほか諸仏塔、あるいは如来降下の際の須菩提とウッパラヴァンナー (蓮華色、Uppalavaṇṇā) 比丘尼についても記されている。このあと玄奘は、東南に行くこと 2 百里足らずでカンナクッジャ (Kaṇṇakuja, Skt. Kānyakubja、羯若鞠闍国) へと向かっている⁽⁵⁾。

現在の Sankisa にはアショーカ石柱の柱頭 (師子ではなく象) があり、塔のあったらしいところにヒンドゥー教の小さな祠が建てられている。

- (1) 大正 02 p.703 中、次節【2】 [2-63] -03 参照
- (2) 『法顕伝』 pp.061~3
- (3) 同上 pp.066~7
- (4) 『西域記』 2 pp.176~8
- (5) 同上 p.181

[33] サーヴァッティ (Sāvattī)

Skt. : Śrāvastī

漢訳 : 舍衛城、室羅筏城、室羅伐城、舍衛国、舍衛、室羅伐、拘薩羅城、憍薩羅城

[33-1] Sāvattī は、コーサラ国王のパセーナディ (Pasenadi) の居城で、その近郊にはアナータピンディカ (Anāthapīṇḍika) 長者が寄進した祇園精舎がある。Sāvattī は【資料集 2】「原始仏教聖典の仏在処・説処一覧」からわかるように、ここを舞台とする経や律は 4,797 点 (舍衛城 2,292、祇樹給孤独園 2,505) と一番多く、つぎに多い Rājagaha の 1,049 点 (王舎城 344、迦蘭陀竹園 490、耆闍崛山 107 ほか) を遥かに越えている⁽¹⁾。これを見ても釈尊の生涯における Sāvattī や祇園精舎の位置の大きさがわかる。

現在の Uttar Pradesh 州 Shravasti district にある Sahet、Mahet という 2 つの村のうち、前者が Jetavanavihāra (祇園精舎) の遺跡、後者が Sāvattī の遺跡である。

舍衛城を Kachchi kuti (スダッタ長者屋敷跡とされる) の位置で示せば北緯 27° 31′、東経 82° 03′ となる。

- (1) 森章司「コーサラ国波斯匿王と仏教—その仏教帰信年を中心に」(『印度哲学仏教学』第 21 号北海道印度哲学仏教学会 2006 年 10 月) p.348 にも同様の数字を示したが、これはその後の修正データにもとづいたものである。なおこの論文はわれわれのホームページ <http://www.google.co.jp/> にもアップさせていただいている。

[33-2] 舍衛城の南の城門から直線で約 600m のところには祇園精舎の址があり、ここには Gandhakuti (釈尊説法の香堂)、Ananda Bodhi Tree (釈尊が阿難のために祈った処) などとされる多数の遺跡が残っている。

また城の東には東園鹿子母講堂 (Pubbārāma Migāramātupāsāda) 址に建てられたとされる小さな僧院がある。ただし考古学的に確認されているわけではない。

[33-3] 『法顕伝』は、城内には2百あまりの家しかなく、人民も少なく、また城中にはマハーパジャーパティール・ゴータミーの精舎、須達長者の井壁、アングリマーラの遺跡に後の人が建てた塔があった、としている。また城の南門を出て1,200歩で須達長者の建てた祇園精舎があり、東向きの門には左右の2つの石柱があり、左柱上には輪形を作り右柱上には牛形を作っている、と伝える⁽¹⁾。

『西域記』は、この国は周囲6千余里、宮城の建物の跡は周囲20余里で、荒廃しているけれども住民はいたとし、伽藍は数百あるが倒壊したものが多く、僧徒も少数で正量部を学んでいる、としている⁽²⁾。そして波斯匿王の宮城址、祇園精舎（東門の左右に高さ70余尺のアショーカ王の建てた石柱）をはじめとする聖址、あるいはヴィドゥダバ (Viḍḍabha, Virūḍaka、毘瑠璃) 王が釈迦族を誅戮するために兵を起すも釈尊と出会うと帰城した処などを伝えている⁽³⁾。

(1) 『法顕伝』p.068

(2) 『西域記』2 pp.243~4

(3) 前嶋氏の前掲書 pp.062~6

[34] スーパーラカ (Suppāraka)

Skt. :

漢訳：輪波勒迦城、輪波羅迦城、蘇波羅城

[34-1] 原始仏教聖典には Sunāparanta (Skt. Śroṇāparāntaka、西方輪盧那、輪那国土、輪那鉢羅得伽国) という地名も見えるが、これは国 (janapada) というべき広い地域をさし、Suppāraka が都市名である。パーリ聖典 *Udāna 001-010* では ‘スーパーラカ海岸 (Suppāraka samuddatira)’⁽¹⁾ とし、註釈書ではスナーパラタ国の「港町 (paṭṭana) 」⁽²⁾ としている。

Sunāparanta は危険な土地であるからという釈尊の制止を振り切ってブンナ (Puṇṇa) が布教した地として知られる⁽³⁾。

(1) p.006

(2) *Theragāthā. A.* (vol. I p.168) には「彼 (ブンナ) は功德の業によって天人中を輪廻して (so tena puññakammena devamanussesu saṃsaranto)、このブツダの誕生時に、スナーパラタ国のスーパーラカ港の居士の家に生まれた (imasmiṃ buddhuppāde Sunāparantajanapade Suppārakapaṭṭane gahapatikule nibbatti)」とある。この港町は西紀1、2世紀、プトレマイオスには ‘Sūpara’ (VII 1.6) と、またエリュトラ海案内記には ‘Sūppara’ (L II) という名で、ギリシャ・ローマにも知られていた。定方晟「バルカッチャの船乗り—仏典とエリュトラ海案内記の接点—」(『印度学仏教学研究』第25巻第1号、1976) p.089

(3) 『モノグラフ』第19号【研究ノート4】「4人のブンナとそれぞれの事績年代の推定」p.099

[34-2] Suppāraka は、現在の Maharashtra 州 Mumbai Suburban district (旧 Thane

district) の Sopara に比定されている。ここからアショーカ王の岩石詔勅（14章よりなる詔勅の断片）や仏教碑銘も発見されており⁽¹⁾、間違いのないであろう。その位置を遺跡のある Sopara Stupa Site で示せば、北緯 19° 24′、東経 72° 47′ となる。

なお紀元後 1 世紀頃の『エリュトウラー海案内記』第 52 節には、「[バリユガザから後の] 地方的な商業地としては次々にスーッパラ（筆者註: Suppara、Suppāraka のこと）とカルリエナ市（筆者註: Calliena）で、後者は老サラガノスの時代に法律で定まった商業地となった」⁽²⁾とあって、商業地として‘スッパラーカ’の名前が登場している。

- (1) 中村元『インド史Ⅱ』（中村元選集 [決定版] 第 6 巻、春秋社、1997）pp.482～3、
「ソーパラー刻文」同書 p.540、『アショーカ碑文』 p.015、*Harry Falk* pp.209～214
- (2) 村川氏前掲書 p.134、*Schoff* p.043

[35] タッカシラー (Takkasilā)

Skt. : Takṣaśilā

漢訳：得叉尸羅城、得叉城、得叉尸羅国、怛利尸羅国、得利尸邏国、徳叉尸羅

[35-1] Takkasilā は現在のパキスタン・イスラム共和国 (Islamic Republic of Pakistan) の Panjab 州 Rawalpindi district の都市 Taxila に相当する。ここには紀元前 6 世紀から紀元後 7 世紀までの都市遺跡が残され、Taxila 周辺には多数の仏教寺院址もあって⁽¹⁾、碑銘も発見されている⁽²⁾。

釈尊の時代よりも後のことであるが、ここにはアレキサンダー大王が東征の際に滞在したし、さらに後にはシルクロードのインドへの入り口ともなったから、古代から西欧世界に繋がる陸上交通路の要点であった⁽³⁾。

- (1) 『世界考古学事典』上「タキシラ」(p.662) の項
- (2) 『碑銘の研究』「碑銘 Taxila1～13」p.1006～p.1013、*Harry Falk* p.252 以下
- (3) 『インド誌』p.036

[35-2] 「ブッダを上首とするサンガ」の侍医となった名医ジューヴァカ童子 (Jivaka-Komārabhacca) がここに医学の勉強のために 7 年間の留学をしたのはその都市遺跡の初期の時であった⁽¹⁾。釈尊自身がここに直接足を踏み入れたことはなく、仏弟子がここに住したという記録もないが、この近くの [30] Sāgala には釈尊時代に仏教の比丘がいたとされるから、ここにも仏教が伝わっていたという可能性は十分にあるであろう。

Taxila を遺跡 Dharmarajika Stupa の位置で示せば、北緯 33° 44′、東経 72° 50′ となる。

- (1) 『モノグラフ』第 19 号【研究ノート 2】「ジューヴァカ (Jivaka) の諸事績年代の推定」p.054

[35-3] 『法顕伝』は、タッカシラー国（竺刹尸羅）の国名の由来について、菩薩が頭を人に施したので、「截頭（截: Skt. takṣa、頭: Skt. śiras）」の意からタキシラと名づけられたという説話（月光本生譚）を記している⁽¹⁾。『西域記』は、この国は周囲 2 千余里、国の大都城は周囲 10 余里とする。また伽藍は多いがすでに荒廃し、僧徒は少なくみな大乘を

学んでいると伝えている⁽²⁾。

- (1) スハタ国（宿呵多国、現在のスワット Swat 地方）の割肉質鴿塔、ガンダーラ国の捨眼塔、タキシラ国の截頭施人塔、その東方の投身餓虎塔をいう。『法顕伝』p.037 註1、ならびに p.043 の註4
- (2) 『西域記』2 pp.058～9

[36] トゥーナ (Thūṇa)

Skt. :

漢訳 :

[36-1] Thūṇa は、「律蔵」によれば仏教中国からする西の辺国として位置づけられている⁽¹⁾。他の辺国の境界についても述べたように、ここには道路が通っていたものと考えられるので基準地とした。

- (1) 後節【7】の「原始仏教聖典に記されたルート②—中国と辺国—」において詳しくふれる。

[36-2] Bimala Churn Law と Cunningham の両氏は、Thūṇa を現在の Haryana 州 Kurukshetra district の Thanesar に比定している⁽¹⁾。現在インドの国道2号線がベンガル湾沿岸の Kolkata から Varanasi、Allahabad、Kanpur、Agra、New Delhi をへて、Kurukshetra、さらにパキスタン国内に入って Lahore から国道5号線に繋がり Rawalpindi、Peshawar に至っている⁽²⁾。Thanesar はこの幹線上の Kurukshetra にある歴史的な町でヒन्दゥー教の重要な巡礼地である。その地を駅名 Thanesar City Railway Station の位置で示せば北緯 29° 58′、東経 76° 49′ となる。

- (1) Bimala Churn Law, *Geography of Early Buddhism*, Bhartiya Publishing House, Delhi, 1973, p.002, Cunningham p.328
- (2) 現在、アジアハイウェイ1号線 (AH1) とも呼ばれている。

[36-3] 『西域記』は、マドゥラー (Skt. Mathurā、秣菟羅国) から東北に行くこと5百余里で、スターネーシュヴァラ国 (Skt. Sthāneśvara、薩他泥湿伐羅国) に至るとし、註釈者はこれを現在の Thanesar に比定している⁽¹⁾。この国は周囲7千余里、国の大都城は周囲20余里で、伽藍が3カ所、僧徒は7百余人がいてみな小乗の教を学んでいる、と伝えている⁽²⁾。

- (1) 前嶋氏の前掲書 p.051、『西域記』2 p.147 ならびに p.148 の註1
- (2) 『西域記』2 p.148

[37] ウッジェーニー (Ujjeni)

Skt. :

漢訳：禅尼城、唵逝尼城、優禅城、鬱闍尼国、唵逝尼国、優禅那国、尉禅国、慰禅国、鬱禅国、優善那邑

[37-1] Ujjeni は、釈尊時代の4大国⁽¹⁾に数えられるアヴァンティ (Avanti) 国の首都で、デカン高原部の最大の都市であった。

マガダ国のピンビサーラ王とも親交を結んでおり、アヴァンティ国王パッジョータ (Pajjota、即ち Caṇḍappajjota) 王の要請を受けて侍医ジーヴァカを派遣したとされる⁽²⁾。

(1) 『モノグラフ』第13号に掲載の【論文15】「パーリ仏典に見る janapada と raṭṭha」
p.195

(2) 『モノグラフ』第19号【研究ノート2】「ジーヴァカ (Jivaka) の諸事績年代の推定」
p.056

[37-2] 現在の Madhya Pradesh 州 Ujjain district にある都市 Ujjain にあたり⁽¹⁾、その地を駅名 Ujjain Junction Railway Station の場所で示せば、北緯 23° 10′、東経 75° 46′ となる。

(1) *Cunningham* p.489

[37-3] 『西域記』はウツジェーニー国 (Ujjeni、鄢闍衍那国) を、周囲 6 千余里で、国の大都城は周囲 30 余里である、としている。そこには伽藍は数十カ所で、倒壊しているものが多く、残っているのは3つか5つで、僧徒は3百余人、大乘・小乗の二乗を兼ねて学習していると伝えている⁽¹⁾。

(1) 『西域記』3 pp.327~8

[38] ウルヴェーラー (Uruvelā)

Skt. :

漢訳：鬱鞞羅婆界、優為界、優留毘村聚、優樓頻螺聚落、鬱鞞羅村、鬱鞞羅聚落、憂樓頻螺池、鬱毘羅、鬱鞞羅、烏留頻螺

[38-1] Uruvelā は仏成道の地であって現在は Bodh Gaya と呼ばれ、ここには成道を記念した大きな塔（現在の現地での呼称 Mahabodhi Temple）が建てられている。Bihar 州 Gaya district に所在する。

[38-2] 本来の Uruvelā は大塔のすぐ東を流れる Lilajan 川 (Nerañjarā、Skt. Nairañjanā、尼蓮禪河) と、さらにその東を流れる Mohana 川に挟まれた白砂の広大な土地に比定され（もともと Uruvelā は「広大な砂地」を意味する）、この2つの川は合流して Phalgu 川になる。その位置を現在 Sujata Temple と呼ばれる小さな寺院の位置で示せば北緯 24° 41′、東経 85° 00′ となる。

[38-3] 『法顕伝』は、そこには降魔成道された処があり、苦行の処から諸処に後人が塔や像を立てており、それらがすべて存在する、としている。そのほか梵天勸請の処、四天王が鉢を献じ商人が麩蜜を施した処、さらにベナレスでの初転法輪後、再びこの地を訪れて三迦葉兄弟を教化された処などにも塔が立ててあると伝えている。また得道の処には3つの僧伽藍があり僧侶が住んでいると記している⁽¹⁾。

『西域記』は、菩提樹の周りの垣根は東西に長く南北に狭く、周囲は5百余歩であり、正門は東に開いて尼連禪河に向かい、南門は大きな花の池に接し、西は険しい地でふさがれ、北門は大伽藍に通じていると記している⁽²⁾。さらに仏陀伽耶大塔の規模、成道後経行の処、仏陀観樹の処、魔王が菩薩を悩ませた処、梵天勸請処等々⁽³⁾、玄奘自らが「菩提樹の垣の

中の聖迹は鱗のように多く並び連なっていてとてもすべてを挙げ尽すことは難しい（〔菩提〕樹垣之内。聖迹鱗次。羌難遍挙）」⁽⁴⁾ とするように、垣の境内の諸聖処には巨細ともにストーパーの数が頗る多くあったことを伝えている。そのほか牧女の奉糜、目支鄰陀竜王池、苦行林、尼連禪那河で沐浴された処、二商主から供養を受けられた処、四天王奉鉢の処、三迦葉を済度された処などを記している⁽⁵⁾。

また菩提樹の北門の外には摩訶菩提僧伽藍（Mahābodhi-saṅghārāma）があつて、これは僧伽羅（Śihala。今日の Sri Lanka）国王の建立によるもので、庭や建物が6つの建造物よりなっており、三階の高殿があつたと伝え、そこに住する僧徒たちは1千人足らずで、大乘上座部の教えを学習し、威儀正しく過していたことを伝えている⁽⁶⁾。

Bodh Gaya には Mahabodhi Temple のほか⁽⁷⁾、アショーカ王の銘文や多数の仏教銘文が発掘されている⁽⁸⁾。

- (1) 『法顯伝』 pp.112～3
- (2) 『西域記』 3 p.073
- (3) 同上書 p.078 以降
- (4) 堀謙徳『解説西域記』（前川文栄閣、1912） p.632、足立喜六『大唐西域記の研究 下』 pp.659～660
- (5) 『西域記』 3 pp.091～8
- (6) 同上書 pp.101～2
- (7) Cunningham, *Mahābodhi, or the great Buddhist temple under the Bodhi tree at Buddha-Gaya* (London, 1892)
- (8) 中村元『インド史Ⅱ』（中村元選集 [決定版] 第6巻、春秋社、1997） pp.522～6、『碑銘の研究』「碑銘 Bodh-Gayā1～39」 pp.136～158、*Harry Falk* pp.228～9

[39] ヴェーディサ (Vedisa)

Skt. :

漢訳 :

[39-1] Vedisa は、*Suttanipāta 005-001* の vs.1011⁽¹⁾ のバーヴァリン婆羅門の弟子16人が世尊を拝謁するために通過したルート上に現われる地名である。それによればここは Ujjeni と Kosambī の中間にあることになる。またこの地はアショーカ王の妃の生地で、息子のマヒンダ (Mahinda) はセイロン島（現在の Democratic Socialist Republic of Sri Lanka）へ行く途中に、ここに立ち寄っている⁽²⁾。

- (1) p.190、次節【2】基礎データ [9-①] -01 参照
- (2) *Samantapāsādikā* (vol. I p.069-p.070)、『善見律毘婆沙』（大正24 p.686 中～下）。なお Vedisa は ‘Vedisa-nagara’ (p.070)、「有村名毘提写」(p.686 中)とある。

[39-2] この地は Geiger 氏により Gwalior 州 Bhopal から 26 マイル北東の Bhilsa に比定されており⁽¹⁾、われわれもこれを採用する。この地は現在の Madhya Pradesh 州 Vidisha district にある都市 Vidisha（英国統治時代の旧名は Bhilsa）であり、その位置を駅名 Vidisha Railway Station で示せば、北緯 23° 31′、東経 77° 48′ となる。

- (1) *Malalasekera II* p.922、『赤沼』 p.750

[39-3] Vidisha 周辺には5つの仏教遺跡、すなわち東南約18kmにAndher、南南東約10kmにBhojpur、南西約9kmにSanchi、そのさらに南西約10kmにSonari、西方約10kmにSatdharaがあり⁽¹⁾、これらの各地からは仏教碑銘も発見されている⁽²⁾。

- (1) Cunningham, *The Bhilsa Topes* (London, 1854)、中村元編著、奈良康明・佐藤良純著、丸山勇撮影『ブッダの世界』(学習研究社、2000)「西インドの仏教センター」p.308
- (2) 『碑銘の研究』「碑銘 Andher1~6」pp.544~5、同「碑銘 Bhojpur1~3」pp.608~.9、同「碑銘 Sāñcī1~920」pp.709~895、同「碑銘 Satdhāra1~2」pp.935~6、同「碑銘 Sonāri1~7」pp.938~940

[40] ヴェーランジャー (Verañjā)

Skt. :

漢訳：鞞闍底城、毘羅然国、毘蘭然国、毘蘭若邑、毘蘭若聚落、毘蘭若、耕田婆羅門聚落

[40-1] Verañjā は、釈尊が折からの飢饉によってやむなく雨安居を過ごされたところで、釈尊や弟子らは馬商人のキャラバンから馬麦をもらって飢えをしのいだとされている⁽¹⁾。

- (1) 『モノグラフ』第18号【論文25】「サンガと律蔵諸規定の形成過程」p.211

[40-2] この Verañjā を『その他国篇』の【補註8】「Verañjā (ヴェーランジャー)」(執筆：森章司)では、「ヴェーランジャーはスーラセーナ国に属し、現在に知られている地名をもとにして言えば、マトゥラーからサンカッサに至る道の途中に位置し、どちらかといえばマトゥラーに近い位置にあったことが推測される」⁽¹⁾とし、「現在はこの古のヴェーランジャーに比定されるべき土地は見いだされていない」⁽²⁾と記している。

一方、この補註では『西域記』の記す毘羅刪拏国について、「これはヴェーランジャーに相当するものと思われる」⁽³⁾とした。もしそれが正しいとすれば、毘羅刪拏国は玄奘が巡歴した7世紀初頭ころ⁽⁴⁾の Verañjā ということになる。この『西域記』の訳註者水谷真成氏は毘羅刪拏を *virasaṇa*、*bhiraṣaṇa*、*virāsāṇa*、*bhilasana* などと読み、今の Etah 県の *Bilsar* に比定する説を紹介している⁽⁵⁾。われわれは *Bilsar* を確認できていないが、Etah 県の周辺地域だとすると、Verañjā と Saṅkassa の間には *Soreyya* が挟まれているのであるから、少し東に偏りすぎ、また Saṅkassa (現在の Sankisa に比定) から北にずれすぎているので、今は採用しない。

現在は、Mathura から Yamuna 河を越えて東に行く道は国道 33 号線であって、Mathura から 38km ほど行くと Hathras という町がある。この町には南北を結ぶ 93 号線が交わっており、釈尊がここで雨安居したときには北の方から馬商人たちが雨期を過ごしていたという状況とも合致するので、古の Verañjā をとりあえず Hathras に比定しておきたい。この位置を駅名 Hathras City Railway Station で示すと北緯 27° 35′、東経 78° 03′ となる。

- (1) p.637 左
- (2) 同上 p.638 右
- (3) 同上 p.638 右
- (4) 貞観 3 年 (西紀 629) の暮、スターネーシュヴァラ国 (Skt. *Sthāneśvara*、薩他泥湿伐羅国)

【1】通商・遊行ルートを想定するための基準地点とその位置確定

からスルグナ国 (Skt. Srughna、率禄勤那国) に来て 29 歳の春を迎え、次いでマティプラ (Skt. Matipura、秣底補羅国) に入って、晩春から夏にかけて滞在し、そこからブラフマプラ国 (Skt. Brahmapura、婆羅吸摩補羅国)、ゴーヴィシャナ国 (Skt. Govisana、瞿毘霜那国)、アヒチャトラ国 (Skt. Ahicchattra、悪醜掣咀邏国)、ヴィラシャーナ (毘羅刪拏国) に至っている。『西域記』2 p.152、前嶋氏の前掲書 p.051

(5) 『西域記』2 p.176 の註 1

[41] ヴェーサーリー (Vesāli)

Skt. : Vaiśālī

漢訳：毘舍離城、毘耶離城、維耶離城、薛舍離城、吠舍離城、毘舍離国、毘耶離国、鞞舍離国、維耶離国、維耶梨国、維耶国、毘舍離、毘耶離、維耶離、鞞舍離、毗耶離、薛舍離、広嚴城

[41-1] Vesāli は、原始仏教時代の四大国の 1 つであるヴァッジ (Vajji) 国の首都で、【資料集 2】「原始仏教聖典の仏在処・説処一覧」から知られるように、釈尊の事績の多さでは Sāvattihī の 4,797 点 (舎衛城 2,292、祇樹給孤独園 2,505)、Rājagaha の 1,049 点 (王舎城 344、迦蘭陀竹園 490、耆闍崛山 107 ほか) に次ぐ 383 点 (ヴェーサーリー 173、大林重閣講堂 158 ほか) である。

[41-2] その故地は現在の Bihar 州 Vaishali district の Chak Ramdas にあり、ここには今も八分された仏舎利の 1 つが祀られた仏塔や重閣講堂址が残され、これらから発掘された遺物がヴァイシャーリー博物館 (Vaishali Museum) に収められている。この近郊にはかつては Ambapālī 園があったが、その故地と思われるところにはアンバパーリ小学校が建てられている。この地区を Vaishali Museum の位置で示せば北緯 25° 59′、東経 85° 06′ である。

[41-3] この地は Gandak 河の東岸 (左岸) にあり、釈尊は最後の旅で Vesāli を出られたときふり返られて、これが最後の Vesāli の眺めだどつぶやかれたのは、この河を渡ったところであったと思われる。河の向こう岸の遠くには重閣講堂 (Kūṭāgārasāla) が見えていたであろう。

この渡し場があったのがコーティ (Koṭi) 村で、われわれは Vesāli と Sāvattihī、あるいは Vesāli と Rājagaha を結ぶ道はここを通っていたと考えるので (1)、Koṭi 村は基準地にしていないが地図には記入した。Koṭigāma に () がしてあるのはそのような意味である。

(1) 『モノグラフ』第 19 号【研究ノート 9】「『涅槃経』の遊行ルート」参照

[41-4] 『法顕伝』は、城北の大林重閣精舎、仏住処、阿難半身塔、城内にあるアンバパーリー女の家などを伝え、城南の 3 里、道の西に位置するアンバパーリー園、釈尊が最後の遊行のときに西門を出て、ヴェーサーリー城を振り返った処などを伝えている (1)。ただしここではヴェーサーリー城を振り返った場所を、Kusinārā 城から東南に 12 由旬行ったところとし、ここから東に 5 由旬行くと Vesāli 城に至るとするから、先に記したわれわれが想定する場所とはかなりの距離の隔たりがある。

『西域記』は、この国は周囲 5 千余里でヴェーサーリー城 (吠舍釐城) はすでに崩壊し、

【1】通商・遊行ルートを想定するための基準地点とその位置確定

その基址は周囲6、70里、宮城の周囲は4、5里で、住民が少しだけいる。伽藍は数百あるが、ほとんど崩壊して3つか5つが残存し、僧徒もまれでわずかであり、宮城の西北5、6里にも僧伽藍があるが、僧徒も少なく正量部の教えを学んでいると伝えている⁽²⁾。

(1) 『法顯伝』 pp.089～090

(2) 『西域記』 2 pp.363～4

[42] 基準地点の分類

最後に上記の基準地点について、最初に掲げた4つの指標のどれにあたるか、仏在処・説処からみると4つの性格のどれにあたるか、通商遊行データとして挙げられているかどうかということを表にしておく。

- ①欄は現在地への比定の指標であって、
 確定しているものには◎、
 先学の学説にしたがったものには○、
 この総合研究ないしは本稿で推定したものには□、
 本稿で仮説（暫定的）的に推定したものには△をつける。
- ②欄は仏在処・説処があるか否かであって、
 あるものには○、
 ないものにはつけない。
- ③欄は（仏在処・説処はないが）遊行記事があるか否かであって、
 あるものには○、
 ないものにはつけない。
- ④欄は（仏在処・説処も遊行記事もないが）他の基準（例えば辺国）で設定したか否かであって、
 該当するものは○、
 該当しないものにはつけない。

	基準地	①	②	③	④
1	アーラヴィー国 (Āḷavī)	△	○		
2	アーパナ (Āpaṇa)	△	○		
3	バーラーナシー (Bārāṇasī)	◎	○		
4	バッドィヤ (Bhaddiya)	△	○		
5	パールカッチャ (Bhārukaccha)	◎			○
6	ボーガ城 (Bhoganagara)	△	○		
7	チャンパー (Campā)	□	○		
8	ダッキナーギリ (Dakkiṇāgiri)	△	○		
9	デーヴァダハ (Devadaha)	□	○		

【1】通商・遊行ルートを想定するための基準地点とその位置確定

10	ガヤー (Gayā)、ガヤーシーサ (Gayāsisa)	◎	○		
11	ゴードーヴァリー河 (Godhāvārī nadī)	△		○	
12	カジャンガラ (Kajāṅgala)	○	○		
13	カンナクツジャ (Kaṇṇakujja)	○		○	
14	カピラヴァットウ (Kapilavatthu)	○	○		
15	コーサンビー (Kosambī)	◎	○		
16	クシナーラー (Kusinārā)	◎	○		
17	ルンビニー (Lumbinī)	◎	○		
18	マドゥラー (Madhurā)	◎	○		
19	マーヒッサティ (Māhissati)	○		○	
20	マンクラ山 (Maṅkulapabbata)	□	○		
21	ミティラー (Mithilā)	△	○		
22	ナーランダール (Nālandā)	◎	○		
23	パータリ村 (Pāṭaligāma)	◎	○		
24	パティッターナ (Patiṭṭhāna)	○		○	
25	パーヴァー (Pāvā)	□	○		
26	パーヴァープリー (Pāvāpurī)	□		○	
27	パヤーガパティッターナ (Payāgapatiṭṭhāna)	□		○	
28	プンナヴァッダナ (Puṇṇavaddhana)	△	○		
29	ラージャガハ (Rājagaha)	◎	○		
30	サーガラ (Sāgala)	◎			
31	サーケート (Sāketa)	□	○		
32	サンカッサ (Saṅkassa)	○	○		
33	サーヴァッティ (Sāvattihī)	◎	○		
34	スパーラカ (Suppāraka)	◎		○	
35	タッカシラー (Takkasilā)	◎		○	
36	トゥーナ (Thūṇa)	○			○
37	ウッジェーニー (Ujjeni)	◎	○		
38	ウルヴェーラー (Uruvelā)	◎	○		
39	ヴェーディサ (Vedisa)	○		○	
40	ヴェーランジャー (Verañjā)	△	○		
41	ヴェーサーリー (Vesālī)	◎	○		

【1】 通商・遊行ルートを想定するための基準地点とその位置確定